

---

# かげろうの向こうに

tokio

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

かげろふの向こうに

### 【コード】

N0428G

### 【作者名】

t o k k i o

### 【あらすじ】

同性愛者である「僕」の、「フツ」の出会い、別れ、恋愛。

## プロローグ

真夏の新幹線ホームは、まさに「うだるような」暑さでした。

容赦なく照りつける太陽は、ホームの屋根を突き抜けて駅全体を熱しているかのようでした。今日も更新したこの夏の最高気温に加えて、電車自体や、駅の設備から放たれる熱気、そして人々から放たれる熱気。

行きかう人々の表情は、あまりの暑さに頬が紅潮しています。心なしか、あなたの顔も紅潮しているように見えます。

それは、けしてこの暑さのせいだけではなく、新たな旅立ちへの期待と不安、

それに対するの興奮や睡眠不足からでもあるのでしょうか。

あなたはホームの柱の陰に立ち、小ぶりのキャスターバッグを傍らに、携帯電話をいじっています。

二人でいるときは、携帯電話を使用しないで欲しいと僕が言って、困らせたり、言い合いをした少し前を、目の前のあなたを見ながら思い出していました。

ただでさえ少ない二人の時間。

せめてその時だけは、あなただけを見つめ、僕だけを見ていて欲しかったのです。

僕はじつとそんなあなたを眺めていました。以前のことを思い出していたら、子供じみていた自分が少し滑稽だったり、それでも何となく可愛く感じたりして、不思議と可笑しくなってきました。

微笑みながらあなたをじつと眺めていた僕に、ふと気付いたあなたが、少し笑いながら、小意地悪そうに言いました。

「なんか、うれしそうじゃなか。そんなに離れるのがうれしいかよ？」

そんなことない。ただ、いろいろ思い出していた。

僕が言うと、あなたは同じことを思い出したのか、携帯電話を見つめて、苦笑いをしました。少し遠い目で僕の顔を見つめてから、さりげなく携帯を閉じました。

「しかし暑いなあ。あつちはもっと暑いんだろうな。

でも東京みたいな、変な暑さじゃないかもしれないな。」

紅潮した頬に、額からの汗がゆっくり流れるあなたの顔を見つめていました。

もうすぐこのいとしい表情が遠く離れていってしまう事は理解していながら、それでも、湿った話を一切しないあなたのそばにいと何分後かにはあなたが遠く離れた町へ旅立ってしまうということが嘘のようです。あなたが明るいので、僕も今日まで明るく、湿った話をしたり泣いたりはしないと決めてきました。本当は、泣いて、わめいてみたかったのが本音かもしれませぬ。

ただ、あなたが考えて考えて決めた決断を、くつがえす性格ではないとわかっていましたし、あなたの決断に泣いてわめくよりも、笑顔で応援しなくてはいけないと思いました。

それでも会話の端々に、あなたと離れてしまう寂しさを、弱い僕はこのぞかせてしまいます。

福岡は、遠いね。

僕は一言言いました。あなたは、僕の気持ちをしゃくしゃくか、声に出さずに、

ただ、うん、と頷きました。

僕とあなたの間、しばらく沈黙が流れました。在来線の発車メロデーが遠くで軽快な音色を響かせていました。

電車の発車時刻が近付いてきたのでしよう。ホームはだんだんと急ぎ足の乗客が増えてきました。

大きな、小さな荷物を持った旅行者、スーツ姿のビジネスマン、さまざまな人々が外の暑さから逃れるように、次々と電車に乗り込んでいきます。

この暑さの中、まだホームに残っているのは、しばしのわかれを惜しむ人々なのでしょうか。

あなたも本当は早く冷房の利いた車内で涼みたいだろうに。

とぼけた顔で、それでも僕に付き合ってくれるあなた。

そんなさりげなく気を遣ってくれるあなただから好きになったのです。

少し離れたホームの柱のそばには、恋人同士と思われるカップルが、固く手をつなぎ合ってひそやかにささやき合っていました。

おそらく彼氏と思われるほうが旅立つのでしょうか。大きめの荷物を足下に置いています。彼女と思われる女の子は、目を真っ赤にして鼻を時折すすりながら、彼氏に寄り添っています。

彼氏はその彼女の肩を抱いて、少し切なげな笑顔で彼女をなぐさめていました。

その光景は、僕にとって、ほほえましく、優しく、そして少し切なく感じられました。

目の前でしきりに汗をハンカチで拭いているあなたに、僕だつて出来るものならば、寄り添いたい、抱きつきたい、抱きしめられたいのです。

許されないわけではありません。それでも、少しの羞恥心と、あなたに抱きついてしまったら泣き出してしまいそうな自分がわかるのです。

ホームの端から、博多方面の線路が延びています。

けして行けない距離ではないのです。そして、この線路があなたが旅立つ博多へ繋がっていることもわかってはいるのです。

線路の先は、まるで鉄板が熱せられたように、ぐらぐらと陽炎が揺れています。

「お、そろそろ乗つかないと、かな。」

あなたが乗る電車の発車案内のアナウンスが流れました。

あなたはキャスターバッグの取っ手を掴み、乗車口に向かってタイヤをガラガラとゆっくり転がし始めました。

あなたのその背中を見ながら、僕はすぐには足を踏み出せずに、まだ線路の陽炎をぼおつと見つめていました。

陽炎の向こうはぐらぐらと揺れていて、その景色は今にも溶けてしまつかのように見えました。

もうすぐあなたが、あの陽炎の向こうへ行ってしまうです。

## はじまりの鐘 - 1

練馬の自宅を出る瞬間から、いや、おそらく多分、「決意」したその時から僕は緊張していました。

自分の性的志向、簡単に言えば、自分が「ゲイ」であることには、高校生の時にはすでに気づいていました。

もともとけして男らしい性格ではありませんでした。だからといって特別女っぽかったわけでもないのですが、体も細身できゃしゃでしたし、周りの男の子にくらべても、活発なタイプでなかったことも原因なのでしょうか。

僕は、小学生の頃も、中学生の頃も、周りの同級生からはよく「オカマ」とからかわれていました。あまり活発でなく、家の中で本を読んだりテレビを見ることの方が好きだったのです。そんな僕を心配してなのか、両親は空手や剣道を習わせたがりでしたが、僕はそういった「男性が主にやるスポーツ」に、異常に拒否感があったのです。僕は泣いていやがりました。あまりに泣いて拒否するので、親も諦めたようです。

教師にしても同じでした。2歳年上の姉の担任をしていた教師が、僕が6年生のクラスの担任になったのですが、男勝りな姉と僕を比較して、

お前と姉貴、男女逆だったらよかったのにな  
と言われたりしたこともありました。

周りからは、オカマだの女みたいだの言われ続け、さんざんないわれようでしたが、それでも特別落ち込んだりするということはなかったのです。登校拒否になるような事もありませんでした。

「オカマ」と言われるのは子供心にもイヤな気持ちでしたが、まだ

自分の中に「自我」みたいなものがなかったのかもしれない。

中学校を卒業した春休みのことでした。

もともと胃腸があまり強くない僕は、外出中、お腹の具合が悪くなり、急いで地下鉄の駅のトイレに駆け込んだのです。

やっと一息ついたとき、ふと何気なく荷物を置くための網棚に目をやると、妙に分厚い一冊の雑誌が置かれている事に気付きました。僕は何も期待せず、何も考えずにその雑誌を手に取りました。表紙には、男性のイラストが描かれていました。雑誌らしく、いろいろな見出しも書いてあるのですが、その時は特別気にもせず、何気なくその表紙をめくったのです。

胸の鼓動が自分でもわかるほど、僕はドキドキしていました。その雑誌に目は釘付けになっていました。ページをめくった途端目に飛び込んできたのは、「男性の裸」のグラビアでした。

誰に見られているわけでもないのに、恥ずかしくて顔が紅潮しているのがわかります。それでも初めての衝撃に雑誌から目が離せずにいました。次々とページをめくっていききました。

そして、・・・僕は興奮していました。

いわゆる、「ゲイ雑誌」だったのです。男性のヌードグラビアが存在するなど、予想もなかった頃でした。「ヌード写真」と言えば「女性の裸」という固定観念が、その頃の僕にはありました。

「僕がずっと求めていたもの」を偶然にも手にいれたような感覚がありました。僕は迷わずにその雑誌をバッグに入れて、意味もなく急いでトイレを出たのです。

帰りの電車の中で、初めて「男性」の乗客を意識していました。

そして、自分が「ゲイ」かもしれないという事をその時初めて意識したのです。

自分が「ゲイ」かもしれないなくて、おまけにゲイ雑誌をいま持っているバッグに入れている・・・どこか悪いことをしてるような胸の高鳴りを感じていました。

そして、目の前に立っているこのひとも、座席で小説を読んでいるあの人も、もしかしたら「ゲイ」なのかもしれない・・・。

男性を自意識で「性の対象」としてみたのは、これが初めてでした。それまでも、アイドル雑誌などの男性アイドルの水着写真などでマスターベーションをしていたのです。それでも、自分がゲイだという自意識がなかったのです。無意識でした。

雑誌を拾って、初めて自分が「ゲイ」というカテゴリーの中の人間なんだという事を自覚したのです。無意識のままでも、時が来れば自覚する時は来るのかも知れませんが、僕にとってこの「目覚め」が良かったのか悪かったのかはわかりません。

拾った雑誌は、僕にとって刺激的なものでした。

思春期である僕にとって、やはり男性のヌードグラビアが一番のお気に入りでしたし、他にも刺激的な内容の小説や漫画が掲載されていて、僕は大いに満足していました。当時は性欲の満足がすべてだったのかもしれませんが。他にもためになる読み物や、出会いのための文通コーナーなど、読み応えのあるものでした。

高校に入学後、本格的にゲイの世界に足を踏み入れるかと思いきや、その後三年間、僕のゲイライフは何も進展しませんでした。

当時は、「ゲイ」といえば、「気持ち悪い」「女みたい」「オカマ」「人に言えない」といった侮蔑的でしか表現されていなかった時代でした。当然、僕自身のなかにもそういうイメージが幼いころか

ら刷り込まれているわけです。

自覚してなかった頃は深く考えて傷つくことなどなかったのに、自覚してしまったために、

ゲイであることを自覚しながらも、心の中では「ゲイはおかしい」「僕はゲイじゃない」という矛盾した葛藤があったのです。女の子に興味があるふりもしました。そのうち本当に好きになるかも思ったりもしていました。そのくせクラスメートの男の子を眼で追ったりしていました。今だけだ。治るだろう。そう思い続けていました。

今思えば、「自分がゲイであること」を心のどこかで認めたくなかったのでしょうか。

幼いころから「オカマ」「オカマ」と侮蔑の意味でからかわれていたことが、どこかトラウマになっていたのかもしれない。

そんな、自分の気持ちとの戦いだけの高校3年間でした。葛藤していたわけですから、ゲイライフが進展するはずもなく、自分で自分を否定したり、精神的に苦しい時期でした。

それでも高校を卒業するころになると、いつのまにか考えも変わっていました。

女性で興奮しようとしても、それはもうずっと昔から不可能でした。とりあえずの問題は、何より、唯一持っていたゲイ雑誌に飽きていたのです。もっとゲイの情報を得たい、知りたいのに、一般のメディアでは、好奇的な意味以外では取り上げられることがほとんどない時代でした。新しい雑誌が欲しかったし、違う形でも情報が得たかったです。

高校時代は心を許せる友人が皆無でした。「オカマ」とからかわれて傷つきたくないために、人と本音で話せなくなっていました。寡

黙に、クールな人間を気取っていました。女の子を好きなふりをし  
て、必要以上に「男」ぶるのも疲れていました。高校生の男子が集  
まれば、決まって「女子」の話になります。興味無い話に合わせる  
のも苦痛になっていました。何より、本音で話したかったのです。

クラスの　くんかっこいいね、男性俳優の　、大好き

こんな風に、自分が本当に思っていることをそのまま話せる相手が  
いたら、楽しいだろうな、と、そのころの僕は思い始めていました。

それが、「同じゲイである友人を作りたい」という考えにたどり着  
くのも時間の問題だったのです。

この頃になると、「自分がゲイである事」を前提として、物事を考  
えるようになったのです。

簡単に言うなら、「吹っ切れた」のでしょう。一時は自分で自分を  
否定していたくらいなのに、なぜ吹っ切れたかといっても答えが出  
ません。あえて言うなら、時間が必要だったのかもしれない。

「吹っ切れた」僕は、まず新しいゲイ雑誌を購入しようと思いまし  
た。

三年前に拾った雑誌、非常に分厚いにはちゃんと意味があつて、  
後半四分の一ほどは広告なのです。大会社の広告などは雑誌の性質  
上、掲載がむずかしいためだと思われるのですが、安い広告料で全  
国各地のゲイに関連する店などの広告を大量に載せているのです。  
スナック、バラエティーショップなど、全国のゲイ関連の広告は、  
ちよつとした「ガイドブック」の代わりに也使えそうです。

スナックの広告を眺めていると、「一人でも気楽に」「友達作ろう」  
といった宣伝文句が目立ちます。店のニーズに合わせた文面も同じ  
く目立ちました。

僕と同じ様に、友達が欲しいと思っっている人がたくさんいるのでし  
ょう。

一般社会ではなかなかむずかしい上に、絶対的人数が少ない。だからこそ新宿二丁目のような町ができたのかも知れません。

僕は、新しいゲイ雑誌を購入するとともに、ゲイスナックにも行ってみようと決意しました。とにかく、自分じゃないゲイと出会いたい、話してみたい、それがすべてでした。そこから自分の人生がなにか変わるのではないか、と思っていました。

決意した瞬間から変に緊張していました。

歩いていても電車に乗ってもそのことばかり考えていました。

無視されないだろうか、値段はいくらぐらいだろうか、昔みたいに馬鹿にされないだろうか、

・・・あまり考えすぎてもしかたないな、と考え疲れて思うのですが、そう思った矢先にまた考えているのです。

僕にとっては、非常に勇気のいる決意でした。

決意を行動に移したのは、春が半分過ぎた頃です。高校を卒業後にはじめたコンビニのアルバイトの、初めての給料が出た後の週末でした。

## はじまりの鐘 - 2

新宿駅に着いたのは、19時を回る頃でした。

週末の新宿駅は、平日の同じ時間ほどではないにせよ、やはり人でごった返していました。東口の駅ビル付近の特設ステージでは、あまりよく知らないタレントが何やら大げさな口調でマイクを持って話していました。僕は、それを眺める余裕も無く、ただ陽の落ちた新宿の、色とりどりのネオンを見つめていました。

初めて訪れようとしている「二丁目」の場所は、事前に地図で調べていました。

東口を出て、新宿通りをまっすぐ東に向かい・・・駅に着いてそのまままっすぐ向かえば10分くらいで着くはずです。行こうと考えているショップは昼から開いているはずでしたし、スナックはたしか20時から開店と広告にあったような気がしました。今から二丁目に行き、適当にブラブラしていれば、そんな時間になるだろうと考えていました。

ところが、いざ新宿の街に立つと僕の緊張は最高潮に達したようでした。

特別買いたい、読みたい本があるわけでもないのに、まず有名な大型書店に入りました。大して興味のない雑誌や、その気もないのに資格コーナーの本を立ち読みしていました。もちろん内容が頭には入っていません。どうしよう、どうしよう、その言葉だけが頭の中を駆け巡るのです。

意味のない立ち読みに区切りを打ち、さて、向かうぞ、とまた大通りをしばらく歩くのですが、いつも早足なはずの僕の歩幅は今日に

限って狭く、またゆっくりとしたものでした。歩きながら考えることはまた、どうしよう、どうしよう、それだけです。

結局、緊張して喉が渴いたということにして、実際乾いてもいないのですが、僕はコーヒーショップに入りました。窓際の席で外を歩く人々を見ながら、二丁目の方向に歩いて行く男性がいると、あ、この人も二丁目行くのかな、などと勝手な想像をしていました。それでも自分自身はまだためらっていたのです。どうしよう、どうしよう、いつまでたってもそんな言葉だけがずっと頭の中を回っていました。

来慣れているはずの新宿なのに、いつもとは全く違う街のような気がしていました。

ここまできて、僕は尻ごみをしていたのです。

それでも、立ち読みにしろ、コーヒーにしろ、いつまでも間が持ちません。それに、グズグズしていたら夜はあつという間に過ぎてしまいます。

僕は深く深呼吸をしました。決意した日の気持ち、自分を否定し続けていた高校時代を思い返しました。

決して軽い気持ちで決めたんじゃない、自分で変えなきゃ始まらない、心の中で自分に言い聞かせました。

軽く自分の頬をぺしん、と叩いて、僕はコーヒーショップの席を立ちました。

伊勢丹、丸井、デパートの立ち並ぶ大通りを進んでいきます。途中いくつかの大きな交差点があるのですが、青なのに渡らず、ひとつ信号をやりすごしたり、相変わらず僕はちよつとした時間潰しを続

けていました。それでも確実に、目指す「町」へと歩みを進めました。

そのうち、僕は地図で調べていた目印である、大型のオフィスを通りの反対側から眺めていました。

この信号を渡つたら、「住居表示的には」新宿二丁目に入ります。ここから眺めてみる分には、居酒屋があつたり、メガネショップがあつたり、花屋があつたり、普通の町と何も変わらないのです。僕が考えすぎていたのでしょうか。まるで「異国」のようなイメージを抱いていた「二丁目」は、いまここから見る限りは全く普通の街並みでした。

あまりにも緊張しまくっていた僕は、少しほっとしました。

ただ、目指す場所は外周ではないのです。信号を渡り、路地を歩き、町の中心にある、

いわゆる「ゲイショップ」がまず最初の目的地でした。ここから見る分には「普通」の町でも、僕が目指しているのは、世間一般的な考えからしたら「普通ではない」場所なのでしょうから。

二丁目を目の前にして、少し何故か落ち着いた僕は、地下鉄の階段の横にある信号待ちをしていました。横に並んだ若い二人の男性が、女性のような言葉遣いで話していました。

僕は少し驚きましたが、なんとか平静を装っていました。その二人は見た目は全く「男性」で、むしろノンケの中に入っても男性らしい風貌だったのです。口髭をたくわえ、大きめの体をスポーティーなファッションで包んでいました。それなのにテレビで見たいわゆる「オカマタレント」と同じような口調で会話をしています。

ああ、そういう町に来たんだなあ、と驚きながらも、変に当たり前

な感覚になっていました。それは、けして心地いい感覚な訳ではないけれど、どこか落ち着く感覚でもありました。

信号を渡り、僕はそのまま路地の中に入って行きました。先ほどの二人と並ばないように、なるべくゆっくり歩いていきました。

いわゆる「メインストリート」までの町並みは、思いのほか「普通の町並み」でした。

ほっとした反面、少し拍子抜けに感じたりもしていました。もつとも、僕があまりに考えすぎていたからなのでしょうが。あんなにどうしようと考えるほど怖くはなかったな、と変なことを考えたりしていました。

それでも道を歩くと、いたるところに、ゲイの男性を対象とした店やスナックなどの看板が所狭しと掲げられています。

ちょっとしたゲイショップが並ぶメインストリートらしき通りには、やはり男性の姿が目立ちました。

カップルなのでしょうか、友達なのでしょうか、二人組や、楽しそうに談笑しているグループもいました。その反面、一人でショップの前に立っている人も結構いました。

誰かが通ると、ほとんどの人がその人の顔、体つき、服装などを見定めするかのように観察しています。それはあくまでも「さりげなく」のようです。僕は何となく、視線で「ゲイ」かどうかってわかるかもしれないな、と思いました。全員がとは断言できませんが、ここに立っているほとんどの人は「ゲイ」だな、と何となく感じたのです。僕と同じ「ゲイ」が、こんなにいるんだ、と改めて感じました。

うれしい気持ちもありましたが、ちょっと傍から眺めていると、な

んとなく「少数派」の中の「独り」を感じて、さみしくなったりもしてきたのです。周りは楽しそうに話してる人々が多く、僕も一人で立っている人の真似をして、少しだけ店の前で立っていたりしてみたのですが、やることもなく手持無沙汰で、周りの楽しそうな会話ばかりが耳についてきました。「クラブ」「パーティー」など、あまり僕には縁がない単語ばかり聞こえてきて、何となく僕は自分がここに立っているのが場違いのような気分になってきました。

ちょっといたたまれない気持ちになって、僕はなるべく人が多く集まっていない方向へ歩いて行きました。

町のほぼ真ん中にある信号を超えると、小さな公園があるはずでした。地図で調べていたのでわかっていたのです。ちょっと落ちた気持ちを回復させるために、休憩しようと思いました。

ところが、その公園もたくさんの人々が集まっていました。僕が缶コーヒーを持って公園内に入る時、どの人も僕の姿を上から下まで見定めしてきました。僕が通り過ぎた後、ひとつのグループの中から大笑いが起きました。考えすぎかもわかりませんが、何となく僕は自分が笑われているような気分になって、僕はそそくさと反対側の出口から公園を出てしまいました。

気分は少しずつ落ちていってしまいました。居場所がないというのでしょうか。どこに行けばいいのかわからなくなってきました。

僕は缶コーヒーを飲みながらそのままさりげないふりをして歩いていましたが、この道をそのまますすぐ進めば、二丁目から出てしまいます。

どうしようかな・・・と考えながら、ゆっくり歩いてた僕でしたが、とりあえず適当な路地に入っているいろ歩いてみようと思いましたが、何となく人とすれ違うのが怖かったです。細い路地ならあまり人もいないだろうと思いました。

まるであみだくじのように、右に曲がっては進み、左を曲がっては進みを繰り返していました。スナックの看板がどの道沿いにも目立ち、時折店の中から楽しそうな歓声が聞こえてきます。週末だからか、小さな路地にも時折グループやカップルらしき二人組が立ち話をしていました。それらを横目でながめては、うらやましくもあり、それでもその分さみしい気持ちが重なって行きました。

何しに来たんだっけ・・・

ああ、雑誌買いにきたんだ。そのあと飲みに行こうと思ってたんだよね。

勇気を出してきたはいいのですが、いざ来るとどこかやはり気が引けてしまっていました。

雑誌を買うだけ。スナックで一杯のむだけ。そう言い聞かせるのですが、その一歩がなかなか踏み出せずにいたのです。

ドラマや映画なら、こんな時、だれかが声掛けてきたり、何かが起こったりするのでしょうか。でも現実はそのなにかはありません。ゆっくりゆっくり、あみだくじの散歩は続いていました。

気持ちはじょじょに落ち込んで、悲しくなってきました。

二丁目きても、結局一人だなあ・・・

みんなどうやって友達出来たんだろう・・・

誰か声かけてきてくれないかなあ・・・

帰ろうかなあ・・・

考えも消極的な方向に向かっていきます。  
ふと空を見上げると、上弦気味の三日月が、まるで僕を嘲笑うように輝いていました。

僕はふうっ、とため息を吐きながら視線を下げました。その瞬間見覚えのあるロゴで装飾された文字の看板が目にとまりました。

あ、「JACK」だ。

今夜、行ってみようと下調べしておいたスナックの看板があったのです。

行こうとは考えていたものの、住所までは記憶していませんでしたし、同じような路地が多く、なかなか発見できずにいたのです。こんなにたくさんさんのスナックが軒を連ねるこの町を、適当に歩いていて見つかったのは本当に偶然でした。

青地に黄色の抜き文字で灯っているその看板を、ゆっくり歩きながら、見つめていました。

少しずつ近づくと、だんだん気持ちが落ち着いてきたようでした。他にも似たような店はいくらでも周りにあるのに、そのときの僕には「JACK」以外は目に入っていませんでした。

ドアの前に立つと、中からは、ぼそぼそと、話し声が聞こえてきます。

このまま帰っても意味ないし。

「一人でも気楽に」って書いてあったし。

いやだったらすぐ帰ればいいし。

・・・やっぱり友達や恋人、作りたいし。

どうしよう、と思う前に、そんなことを自分に言い聞かせていました。

雑誌で下調べした分、自分の中で「JACK」に親近感を感じていたのかもしれませんが。

ちょっと重そうなドアのノブを握り、その扉をそろりそろりと開きました。

ドアにつけてあるベルの音が、チリンチリンと鳴りました。

それは僕にとって、自分らしい人生の始まりの扉であり、はじまりの合図だったので。

### はじまりの鐘 - 3

「いらっしゃいませえ。あら、可愛い。どうぞ。」

店に入った瞬間、カウンターのの中の、まさにテレビなどでよく見ていた「ゲイ」といった感じの店員にそう言われて、僕は面喰らいました。

流行りの有線の歌が流れる店内は、週末のせい、カウンター一杯にお客さんが並んでいました。といってもカウンター席は10席ほど、カウンターの後ろに5人ほどが座れるボックス席があるような感じの、こじんまりとしたお店でした。見た感じ、他に店員はいないようでした。

面喰らった理由はそれだけではありませんでした。その、カウンター一杯のお客さん、ボックス席に座っているお客さん、そのほとんどが僕が店のドアを開け、ドアのベルが鳴った瞬間、一斉に僕の方を向いたのです。大勢の視線にさらされている上、「可愛い」などと言われたもので、僕は恥ずかしくいたたまれない気持ちになりました。

「うちの店、はじめてだよね？ようこそ。どうぞ。ほら、あんたちよとずれてあげて。ごめんね。こっちももう少しそっちに寄ってくれ。」

そういって、マスター？らしき店員が、カウンターの真ん中の席をかきわけるように、ひとつの席を用意して、僕に手招きをしました。

間接照明のライトが当たって、背もたれの銀のバーが光っているその空席は、狭くこったがえしたその店内で、不思議な光を放っているように見えました。そしてポツカリと空いたその空間が、自分の

ために用意された席だと思つと、うれしいような、でも本当に座つていいんだろうか、そんな気分になりました。今ならまだ後ろのドア開けて店出れるよな、などと、この期に及んでまだそんな事を考えたりする自分もいました。

「ほら、早く座つて。お待ちせしました。」

そんな僕の気持ちを見透かすかのように、マスターが急かしました。僕は覚悟をきめて、左右に寄つてくれたお客さんに、すいませんと軽く会釈をしながらゆつくりと席に着きました。

「はじめまして。JACKへようこそ。私、一応このママやつてます、タカシと申します。よろしくね。えっと、お名前うかがつていいかしら？」

あ、そうか、マスターじゃなくてママなんだ、と、妙に冷静に考えながらも、次の瞬間には戸惑っていました。名前。よくゲイは本名じゃなく、違う名前を使うらしいのです。かといって、何も考えていなかった僕は、どうしようとして瞬考えてしまいました。

「えっと・・・春彦です。」結局、自分の名前をいつまでも言わないのもおかしく思われそうで、僕は普通に自分の本名の名前を告げました。

「ハルヒコ、ハルちゃんね。可愛い名前じゃない。見た感じ結構若いみたいけど、お酒大丈夫な歳かしら？何にします？」

「20歳なんで大丈夫です。えっと・・・ビールください。」  
本当は18なのですが、スナックに来てお酒を呑まないのも変なので、20歳ということにしようとして前々から決めていたので、言葉はスムーズに口から出ました。

「20歳！！ちょっとアタシの半分だわ！若くっていいわね。」  
突然、左隣のお客さんが僕とタカシさんを交互に見るようにして話しました。僕は少し驚いて、それでも左を向いて少し会釈気味に微笑むと、そのお客さんは少し酔っているのか、うれしそうに笑顔でニッコリ僕に向けて笑いかけました。「アタシ」といっても、見た目はスーツをピッタリ着こなしていて、短髪をたたせた精悍な「いい男」の顔立ちでした。その下の体もかなりがっちりしていそうです。外で出会えば、普通に結婚して、子供もいて、仕事もバリバリこなす男性としか思えない感じでした。40歳と言っていました。が、まったくそうは見えず、30歳でも通用しそうに若々しいのです。

「アタシ、カズ。よろしくね。今日はもう帰らなくちゃだけど、また会ったら話しましょうね。」

「ほら、カズ子、ちょっとかい出してないで帰りなさいよ！・・・はい、おまたせ、ビールです。」

そう言うと、タカシさんは、僕の前に置かれているコースターにグラスを置いて、ビールをゆっくり注ぎ始めました。僕は控えめにそのグラスに手を添えました。

「カズ」さんは、もう会計も済んで帰るところのようでした。タカシさんとカズさんは、ちょっとかいなんか出してないわよ、とか、四路は恥じらいがないのね、など、傍から聞けば喧嘩のような、でもお互い笑顔で言い合っていました。最後は僕に、じゃあねえ、と笑いながらカズさんは帰って行きました。

漫才のように、言い合いを楽しんでいるようです。ゲイスナックで見ず知らずの人と、ほんの少しでも会話したことで、僕の気持ちは少しほぐれました。

「カズ子・・・カズ、やかましくてごめんなさいね。でも人懐っこくていい人なのよ。40歳とか言ってたけど、本当は45歳なんだけどね。」

そう言つてタカシさんは笑いました。

「え？45歳？・・・30歳くらいにしか見えないと思つてました・・・」

僕は驚いて言いました。30歳でも通用しそうな見た目なのに、45歳には本当に見えなかつたのです。オシャレでしたし、普段接する45歳に、あんな若く見える人はいなかつたのです。

すると、タカシさんはいつそう大声で、手を叩いて笑い出しました。他のお客さんも、暗闇乙女だのなんだの言つて楽しそうに笑つています。カズさんは、JACKのコメディークャラクターのようです。

「今度カズに会つたら言つてあげて。相当喜ぶわよ。」  
ひとしきり笑い終わつた後、タカシさんは言いました。

「ハルちゃんはどうしてうちの店来てくれたの？」

「あ、雑誌の広告見て、一人でも気楽に、とか書いてあつたんで・・・」

「本当、雑誌の広告つて効果あるのねえ。」

「でもあの広告詐欺だよな、メツチャお洒落つばいけど、本当はこんなジャン。」

「あんた、こんなつてなによ。失礼ねえ。ねえ、ハルちゃん。」

「・・・あ、いい店ですよ・・・」

「遠慮しないで言つていいんだよ。汚くてびっくりしたつて。」

タカシさんと会話してるつもりが、ほかのお客さんが会話に入つてきたりして、言葉が右往左往しています。さっきのカズさんもそうでしたが、言葉は罵っているようでも、みんな笑顔で、笑い声が何度も起りました。みんな、この「JACK」がすごく好きなんだなと感じましたし、僕のような初めての客にも気軽に優しく接してく

れるのが、本当にうれしかったのです。狭い店だけに、みんなで話をしていてる感じで、入って間もないのにとっても居心地がよい店だな、と感じていました。

「で、ハルちゃんはどうなのタイプなの？」  
タカシさんが僕に聞きました。

「タイプ・・・」  
今まで、男性はどの方がタイプか、という会話をしたことが無かったので、僕は少し言葉に詰まりました。高校時代やバイトのコンビニの客で、少し気になる人はいたりしたけれど、いざ「タイプ」と聞かれると、少し悩んでしまいます。

「そんな悩まなくっていいのよ、例えば芸能人とかさ。」  
お客さんの一人が言いました。  
そうは言われても、なかなか難しかったのですが、とりあえず、いま流行りのドラマに出ている俳優の名前を告げました。

「ああ、いま「月9」出てるよね。なかなかいい男だね。」  
他の誰かが言いました。すると、話題はそのドラマの話題に移り、僕はすこしほっとしました。  
すっかりぬるくなったグラスのビールを、一息ついた僕は一気に飲み干しました。

慣れない雰囲気、楽しいながらもまだ戸惑いを少し感じていました。居心地はいいんだけど、いったん少し落ち着きたいという感じでしょうか。もちろん他のお客さんも、僕に気を遣って話しかけてくれたり、話の輪に入れてくれているのですが。

そんな気持ちを察したのでしょうか。タカシさんが、僕の目の前の空のグラスにビールを注ぎながら、言いました。

「うちの店ね、たまにお花見したり、みんなで花火大会行ったりして、たまにイベントやるのよ。その時に撮った写真あるから、よかったら見てみる？・・・ま、そんなにいい男くるわけじゃないけど、もしかしたらタイプのお客さんいるかもしれないしね。気になる人が写ってたら、言ってみる。」

そう言っつて、タカシさんは僕に3冊ほどの薄いフォトブックを手渡ししました。一冊一冊の表紙に、日付と、その時のイベント内容が書かれていました。表紙の角は、何度もめくられたことがパツと見でわかるほど外側に丸まっています。タカシさんは「ちよつと失礼。」と言っつて、カウンターの外に出てボックス席の片づけを始めました。

少し時間を持て余した僕は、そのうちの1冊を、めくり始めました。

## はじまりの鐘 - 4

そのフォトブックの表紙には、「1992・8・10 館山旅行」と題名がついていました。今が1994年ですから、2年前の旅行の写真のようです。

表紙をめくると、バスの中でビールを片手にはしゃぐ二人組、マイクを持ち何やらバスガイドの真似事をする人が写っていました。

そのまま僕はペラペラとめくっていきました。写真は特別なものな訳ではなく、ありふれた普通の旅行の思い出写真です。ふと僕は、隣に座っているお客さんに尋ねました。

「この旅行はJACKのお客さんや従業員だけで行ったんですか？」  
すると、隣のタクヤさんという、少し太り気味で、でも笑顔が優しく何かと初めての僕を気遣うように話しかけてくれているお客さんが言いました。

「ん？・・・これいつの・・・？あ、館山行った時のか。このときは、ママが仲よくしてるFUTUREって店と合同で企画して行ったんだよ。何人ぐらいだったかなあ・・・。多分80人くらいで行ったのかな。ゲイばかり2台バス貸し切ってね。楽しかったなあ・・・。」

へえ、そうなんですかあ、ありがとうございます・・・と僕はタクヤさんにお礼を言って、また写真に目を戻しました。

写真は、どれもこれもよくあるものなのです、高速のサービスエリアでソフトクリームを食べる人達。旅館で、浴衣姿でポーズをつけ

る人達。館山の海岸でしょうか、バナナボートに乗って手を振る人達、砂浜の木陰でビールを飲む、ちよつとお疲れ気味の人達。

さっきのタクヤさんのことばにあったように、この写真に写っている人々は、みんな僕と同じように「ゲイ」なのです。

僕は、ゲイがこんな風に集まって、旅行したり、遊んだり、そういうことが出来るんだ、という事実には圧倒されていました。僕は今まで何をやっていたのでしょ。

写真に写る人達は、とても楽しそうで、何の屈託もない笑顔に见えました。もつと早く踏み出していけばよかった、と思いました。そして、自分にもこういう楽しい未来があるんだろうか・・・とも。

「どれ、どれ、・・・あ、これ俺。痩せてたんだよな。」  
隣にいるタクヤさんが、僕の見ている写真を覗き込みながら言いました。

ですが、僕には痩せていたといえど、タクヤさんの指差した写真にタクヤさんをどうしても見つけることが出来なかったのです。

「え？この7人のなかにいるんですよね、・・・どの人？ごめんなさい、僕、どうしてもわかんないです。」

僕はタクヤさんに言いました。

「何だよー、俺、そんなに変わったんかなあー。」とタクヤさんが冗談っぽくふくれました。

これ、これ、とタクヤさんが昔の自分を指さそうとした時、ポツクス席の片づけをしていたタカシさんが僕とタクヤさんのうしろから覗き込みました。

「あらー！これ館山でしょ？写真、店にあってもアタシ自身は写真あまり見てないからさあ。っていうか、この写真のひと、素敵！、ってこの写真見せられたことないのよ、アハハ。ごめんね、タクヤ。」

「  
タカシさんがそういうと、タクヤさんは、まいったなあ、というよ  
うな笑顔で笑っていました。タクヤさんが指さした場所には、今よ  
り25キロ痩せていたという、似ても似つかぬ姿かたちの、昔のタ  
クヤさんが写っていました。」

「ええー、スゴイ、嘘みたい、何で・・・ってスイマセン。失礼で  
すよね。」

僕は思わず驚嘆の声を上げていました。その言葉に周りから笑いが  
起きていました。

タクヤさんはもう聞かれ慣れているような感じで、ただニコニコ笑  
っていました。

「ハルちゃん、タクヤさ、2年前に彼氏ができてさあ、それからな  
のよ、ブタみたいにブクブクふとりだしちゃってさあ。あれね。幸  
せ太りってやつ。」

ブタみたいに、のところで、周りの笑いと、キツイなあーという  
タクヤさんの声が混じりました。

「ハルちゃんも、いまは痩せてるけど、彼氏できたら太っちゃうか  
も知れないから気をつけなさいね。だって、このタクヤ・・・同一  
人物じゃないわよねえ！こんなのわかる方がおかしいわよ。」

タカシさんの毒舌にまた笑いが起きました。僕はフォトブックをそ  
っとテーブルの上に置いて、グツと一口ビールを飲みました。

タカシさんと手を合わせて冗談を言い合っているタクヤさんのはち  
きれそうな笑顔を見て、ああ、このひとは今、幸せなんだな、と感  
じました。それと同時に、初めて来た店で一番優しく気遣って話し  
かけてくれたタクヤさんが、すでに彼氏持ちだということに、ほん  
の少しだけ落胆を感じたのです。

たわいもない話をしながら、瞬間に時間は過ぎていきました。

「たわいもな」くても、自分が、ゲイである自分のままで会話が出るというのは、僕にとって非常にラクな事でした。今まで初対面の人と話す場合、僕は何かと緊張していました。なぜなら、誰しもが僕を当たり前のように「女性好き」と思っていて、

「彼女はいるの？」

「どういう女性がタイプ？」

という話をふってくるからでした。もちろん相手には何の悪気もないのです。

幼い頃「オカマ」とからかわれた経験から、高校時代からは、変にクールぶる癖がついていました。必要以外のことは話さない、自分のことは極力話さない、何故なら、僕にとって「自分を偽る」ことはとても苦手で嫌なことだったので。それでも人と親しくなるにつれて、自分のことは分かってほしくなるものです。それでも僕は自分の事を包み隠さず言える勇氣は持っていませんでした。

だから僕は人とは一線引いた付き合いしか出来ませんでした。いま友達と呼べる友達もいないのです。

でも「JACK」では、そんな必要がないのです。当たり前のように僕も周りも「ゲイ」であり、それが当たり前前提として会話ができるのです。女性のような「オネエ言葉」で話すゲイもいれば、女性に興味がある「ノンケ」とまったく変わらない感じのゲイもいます。それでもみんな「ゲイ」であって、自分を偽ったりする必要がないのです。

僕の心は弛緩していったのです。悪い意味ではなく、今まで張りつめていた糸がゆっくりほどけていったのです。初めての店で緊張はしていたけれど、違う意味での緊張がなくなっていました。その緊

張は、多分もうずっと長いこと抱えていた緊張でした。自分と同じゲイである人々との会話を、僕はとても楽しんでいました。

それでも時間は過ぎていきます。そろそろ帰らなくてはいけない時刻になっていました。今頃僕は、新宿での「意味のない時間潰し」を後悔していました。すぐに来ていればもっと楽しい時間が過ごせたのに・・・と残念でなりません。

「ママ、スイマセン。僕そろそろ帰ります。」

僕はひっそり言いました。何となく後ろ髪を引かれるような思いでした。

「アラ、終電?・・・」

タカシさんに聞かれ、僕はうん、とうなずきました。明日も昼からコンビニエンスストアでのバイトが入っていました。

「・・・かわいい子がいなくなったらつまんないわ。・・・まあでも今日がデビューだものね。」

と、タカシさんは伝票のチェックを始めました。ボールペンで何やら書きながら、タカシさんは言いました。

「今日はありがとうね。もしよかったらまた来てちょうだい。アタシは別としても、お客さん、みんな優しい人ばかりだから・・・まあなかには癖があるのもいるけどね。」

タカシさんが言いました。僕は、何故か一番最初に隣に座っていたカズさんを思い出して、少し笑ってしまいました。

「アハハ、カズみたいなのもいるけど、あの子も性格いいからね。とにかく、時間があつたらまたおいでよ。待ってるわね。」

そう言つて、タカシさんは「¥2000」と書かれた伝票と、「JACK」の店の名刺をくれました。名刺は、看板とは逆の色使い、黄色地に青い文字で「BAR JACK takashi」そして店の住所と電話番号が印刷されていました。

僕は財布から1000円札を2枚取り出し、心持ち指で伸ばした後、タカシさんにそれを渡しました。

「はい、ちようどね。今日はありがとうね。」

タカシさんが言った後、僕は椅子から立ち上がりました。隣のタクヤさんをはじめ、他のお客さんが口々に、

「おやすみなさい。」

「ハルちゃん、またね。」

「今度また話そうね。」

と声をかけてくれました。僕は何か感激して涙が出そうになりました。

おやすみなさい、またお願いします、そんなことを口走りながら、タカシさんが開けてくれている店の扉まで歩いて行きました。

「本当に本当にまたおいでね。待ってるよ。おやすみ。」

タカシさんが最後にそう言いました。僕も、うん、また来ます、と言つて、軽く会釈をしました。

チリンチリン、と扉についているベルの音が鳴つて、扉は閉まりました。

僕はゆっくり歩き始めました。終電はゆっくり歩いても十分間に合います。道を歩いていると、数時間前、悲しい気分で歩いていたのがウソのようです。

週末だからか、店の前、通りにも人が溢れています。さつき歩いた時は、楽しそうに話したりはしゃいでる人たちがうらやましくて、そして多分悔しかったのです。自分が欲しくてしょうがない「同じゲイである仲間」と「楽しい時間を享有」している人達が。

でも、誰もが最初は「今日までの僕」だったのかもしれませんが。

一度行ってしまえば「何で今まで躊躇してたんだろう。馬鹿みたい。」と思うけれど。

一步踏み出すまでには、悩み、苦しみ、葛藤して、それでも一步踏み出して、ゆっくり進んで、あんな風に楽しく笑いあえる仲間が出来るたのかもしれない。

さつきは彼らを見て、少し落ち込んだけれど、今の僕は大丈夫でした。いつか僕も友達と、あの場所で思い切り笑って話せたらいいな、と思うほど気持ちは前向きになっていました。

僕はタカシさんにもらった「JACK」の名刺をポケットから取り出して眺めました。

住所には、「東京都新宿区新宿二丁目・・・」と記載されています。

「うわ、僕も二丁目デビューしちゃったんだなあ。」

そんなことを呟きながら、なんとなく嬉しいような、誇らしいような気分になって、僕は自然と歩くスピードを速めていました。

明日の仕事もがんばらなくちゃなあ、明日の発注なんだっけ、あ、雑誌買おうと思ったけど忘れたなあ、でもまた今度買えばいいか、  
・ ・ ・ 関係ないことを考えていても、ふと気付くとつぶやいています。  
た。

「今日は本当に勇気出して行ってよかった……。楽しかった……」

ふと空を見上げると、JACKに行く前に見た上弦気味の月が、さつきと同じように輝いていました。

さつきと何も形は変わらないのに、今度の月は、「よかったね」とほほ笑んでくれているように見えました。

## ナイアガラ - 1

新宿の街には、今年開催されるアトランタオリンピックの文字を冠した広告やフラッグが目立ち始めていました。

僕は、待ち合わせのコーヒーショップで待ちぼうけをくらっていました。

まあ、いつもの事なので、僕は暇つぶしのために持ち歩いている分厚い小説本を読んでいます。

最初のうちは笑って許していました。まだ深い付き合いでなかったことによる遠慮が僕の中にあつたのです。

それが待ち合わせの度に繰り返され、また会うほどに付き合いも深くなれば、いい意味でも悪い意味でも、お互いの中に遠慮がなくなっていくものです。何度目かの待ち合わせに1時間遅刻してきたクニオに、僕はあからさまに怒りをぶつけました。

「ごめん、次からは本当に気をつけるから。」

その時クニオは、めつたに見せないしおらしい顔でそう言いました。その時は今後なおってくれたらいいな、と期待をしましたが、その期待はすぐに裏切られました。しばらくは遅刻がなくなるのですが、そのうちまた遅刻が増えてくるのです。

最初のうちはその都度怒り注意するのですが、しばらく経つとまた・・・という繰り返しでした。堂々巡りでした。もともとのんびりした性格なのでしょう。遅刻しても悪びれた様子もなく、またなんとなく許してしまうのは、クニオの持っている天性なのかもしれませ

そのうち僕は何だか怒るのもバカらしくなり、やめてしまいました。怒りを通り越すと諦めが生まれるのでしょうか。言っても仕方ないという気持ちと、クニオはそういう子だから仕方ないという気持ちでした。それでも僕はクニオが友達として好きでしたし、1週間に一度くらいはこうして待ち合わせをしては会っていました。

少し目が疲れて僕は小説から目をあげました。

夜の新宿の交差点を、コーヒーショップの二階の窓から眺めてみました。見なれた景色です。信号が変わると人も車も一斉に動き出します。赤信号になったばかりなのに、歩道にはすぐに信号待ちの人々が集まります。僕はこちら側に向かう人波の中にクニオを探してみましたが、もう暗いのと、あまりの人の多さで見つけることが出来ません。

あの中にも、今から二丁目に行く人がいるんだろうな、と考えていました。ここから見てみると、誰がノンケで誰がゲイなのかなんて全く判別は付きません。近くで見たってわからないのだし、もしかしたらそんな見分け自体が意味がないのかもしれない。

人波の中の小さな一人一人のシルエツトを見ながら、僕もあの中に紛れたら、ちっぽけな存在なんだろうな、と、ただ何となく考えていました。初めて二丁目に行った時も、大きな決意と緊張を抱えながら歩いていたら、他の誰かからしたら、何でもない通行人でしかない存在でしかなかったでしょう。

ただ、とりとめもなくそんな事を考えていました。ふと腕時計に目をやると、待ち合わせの時刻から20分が過ぎていました。クニオはまだ来る気配がありません。

僕は店員にコーヒーのお代わりを頼みました。初めて二丁目に来た日に、意味のない時間潰しのために入った店でした。安いファスト

フードのようなコーヒーですが、それでもホットコーヒーの入れたてがカップに注がれると、香ばしい匂いがプーンと鼻をくすぐります。

僕は、そんな匂いも味も楽しむ余裕のなかった二年前のあの日を出して、なんか恥ずかしくてかわいくて、一人微笑んでいました。

初めてJACKに行ったあの日から、二年の月日が流れていました。

あれから僕は、多くて一週間に一度、少なくとも二週間に一度はJACKに通うようになっていました。

コンビニエンスストアの時給もそんなに高いものではありませんし、JACKでの飲み代は安い方とはいえども、当時18歳の僕にはそれなりの価格でした。

それでもぼくはJACKに通うことを唯一の楽しみにしていました。JACKに行けば同じゲイの仲間と楽しい時間を過ごせるのです。

この頃の僕にはJACKでの時間がすべてでした。何度も通ううちに、タカシさんや従業員のトモも打ち解けて、それこそ冗談ののしり合いも多少できるようになりました。顔見知りもだんだん増え、JACKに行けば、知っている顔が必ず何人かいるようになっていきました。店に入った瞬間、「ハルー、おはようー。久しぶり！」と声をかけられることも多くなり、どこか誇らしいような、こそばゆいような気分になっていました。

そのうち朝まで飲んでいることも多くなっていきました。僕が飲みに行くのは大抵翌日がバイトがない日でしたから、朝5時でJACKが終わった後、タカシさんや他の常連のお客さんと、他の店に飲みに行くこともありました。タカシさんが仲よくしている「FUTURE」に行くことがほとんどでしたが、JACKしか知らない僕

にとつては、行ったことのない店に連れて行ってもらうのは、とても刺激的でしたし、新鮮味がありました。

クニオに出会ったのは、そういった縁からたまに通うようになった「FUTURE」でのことでした。

クニオは、FUTUREの従業員でした。週末のみ入っているとのこと、僕が飲みに行くのもほとんどが週末なので、顔を合わせ話しているうちに、好きなミュージシャン、スポーツ、趣味などがかなり一致していることがわかり、話が弾むようになっていったのです。

それでもしばらくは客と従業員の関係での付き合いしかありませんでしたが、お互いが好きな、バレーボールの世界大会が日本で開催されたとき、待ち合わせて観戦に行ったことがあり、それから二丁目以外の場所でも会うような付き合いが始まっていました。僕にとつては初めての「ゲイの友達」と言える存在でした。

友達も出来、JACKでの顔見知りも増え、僕のゲイライフは確実に二年前より充実していました。ごくわずかながら、信頼できる人には自宅の電話番号も教えていましたし、また教えてもらっていました。僕はまだ練馬の自宅に家族と住んでいましたし、自宅の電話番号を教えることにはいささか躊躇の気持ちもあつたのですが、JACKで何度も会い、人間性を知った上で、信頼できると感じた人のみに教えていました。かといって実際電話で話す機会はそうなかったのですが。

このようにゲイライフが充実していく一方、少しだけマンネリ感を感じていたのも事実でした。

僕は未だに「恋」らしい「恋」が出来ていなかったのです。

JACKに初めて行ったすぐ後に、男性との初体験は済んでいました。

3、4回目のJACKだったでしょうか。いつも通り終電前には店を出たのです。

僕は少しだけ飲みすぎていました。初めてJACKで会った常連のお客さんから、何杯かウーロン割りをごちそうになっていたのです。その頃の僕はあまり焼酎は飲み慣れていなかったのと、自分で注文していたビールと交互に飲んでいたのでしょうか。帰り道、少しふらついてしまっていたのです、

それでも意識ははつきりしていましたし、歩いて駅に行くのも何ら支障ない程度の酔いでした。

二丁目から出て、新宿通りの舗道を駅に向かって歩いていたら時です。突然後ろから僕の顔を覗き込んできた男性が少し息を切らせながら、僕に話しかけてきました。

「……すいません、さつき二丁目の店から出てきてたよね、良かったら少し話しませんか？」

JACKを出てきたところを偶然通りかかって、そこからずっと後を追ってきていたのでしょうか。年のころは僕より5歳くらい上に見えました。キャップ帽にグレーのパーカー、ゆとりのあるジーンズにスニーカーといった風貌は、スポーティーで、遊び慣れているようにも見えました。僕は痩せていて、お世辞にも「男」を感じさせる見た目ではありませんでしたから、その人の見た目には魅かれるところがありました。

もてそんな感じなのに、なんで僕に声掛けてきたんだろう。  
気があるふりして、なんかの勧誘かなあ……。

新宿駅へ向かう道を歩きながら、一瞬そんなことを考えました。返事をするまでもなく、その人は横に並んで歩き始めました。少し酔っていた僕は、疑問をそのままその人に尋ねました。

その人は、一瞬きよんとした後、僕の肩を叩いて笑い始めました。

「全然もてないし、勧誘なんかじゃないよ。さっき店から出てくるところ見てさ。あ、可愛いな、タイプだな、と思って。悪いとは思ってたけど、ここまでつけてきちゃった。なかなか話しかけるタイミン  
グがつかめなくてさ。」

可愛い、タイプといわれて僕は少し舞い上がりました。正直うれしかったのです。

その人は、少し照れくさくて下を向いている僕に向かって、こう言いました。

「今日……、急いで帰らなきゃいけないの？」

僕の肩を掴むその人の指の力が、少しだけ強くなったような気がしました。指の先からその人の体温が伝わってくるような感覚と、僕の心臓の鼓動の早さが、その指を通じて伝わってしまったのではないかという感じがして、僕は何も返事が出来ずにいたのです。

「明日、休み？」

その人は続けて言いました。僕は素直にうん、と頷きました。

「じゃあ、時間は大丈夫だね、・・・俺みたいなの、タイプじゃない？」

そう言われると、僕はまた返事につまりました。その人の、少年っぽい風貌は正直魅力的でしたし、タイプといえばタイプなのです。ただ、終電に時間の余裕がそんなにある訳ではないのです。電車がなくなれば、何となくその先は予想できることです。

何より、さつき会ったばかりの人でした。どうしよう、どうしよう、また僕は悩んでいたのです。ただ、不安な反面、この先の展開に大きな期待をしていた僕がいたのも事実です。

「タイプじゃ・・・なくないよ。」

僕は結局そう言いました。

酔いが僕を少し大胆にしたのかもしれませんが。

その人はそれを聞くとうれしそうに微笑みました。僕の顔を覗き込むようにして、

「知ってるところ、あるんだ。そこ行こう。」  
と言いました。

僕の肩を掴んでいた指が、人の目をさりげなく避けながら、そっと僕の頬を撫でました。

その人が「こつちなんだ。」と指をさした方向に歩きだす背中を見ながら、僕も半歩遅れて着いて行きました。

あ、僕、まだこの人の名前も歳も知らないな。

展開の早さに少し戸惑いながらも、僕はそんな事を考えていました。何で知らない人に着いて行っているのかな、なんてことも思いなが

ら。それでも行き着いた先にたどりつくものはわかっていました。そして、不安よりも、大きな期待をしながら、僕は歩いていました。

不意に肩を叩かれました。

「なあに綺麗ぶってんの。」

顔をあげるとそこにはクニオの笑顔がありました。

時計を覗くと、待ち合わせの時間から40分が過ぎる頃でした。

「綺麗ぶってなんかいないよ。……ってというか、相変わらずあなたは……」

「まあまあ、とりあえず出て居酒屋行こうよ。腹減っちゃった。」

僕に文句を言う間を与えず、クニオは言いました。まったく……と思いつつも、クニオのペースに引きずられている僕でした。クニオは僕の飲んでいたコーヒーカーップをせわしなく片づけながら、「ほら、早く行くよ。」と僕を急かしました。

何で待ち合わせには遅れるくせに、いざ会ったこんなに急ぐんだろ。

僕はそんなことを心で思いながら、小説本をカバンにしまいました。

「とろいなあー、インテリぶっても似合わないから。」

クニオが笑いながら言いました。

「うるさい。とろいってどっちがだよ！」

僕も笑いながらそう言って立ち上がりました。

初夏の夜の風は、心地よく僕らの頬を撫でました。僕はさつき考えしていたことを思い出して、自分の頬に何気なく触れてみました。あ

の夜の自分の頬の熱さと、肩に感じた体温は、なぜだか未だに忘れることができませぬ。忘れたいような、忘れたくないような、複雑だけれど大事な思い出なのです。僕は何となく切ない気持ちになりました。

クニオはそんな僕的心情には気づかず、スタスタと目指す居酒屋に向かつて歩いていましたし、喋りながらせわしなく歩いていると、僕のそんなセンチメンタルもそんなには長くは続きませんでした。

## ナイアガラ - 2

「何食べる？・・・ほっけ焼きと、串焼き盛り合わせ・・・あと適当に頼んで。」

クニオはそう言って僕の方にメニューを向けて渡しました。最近、JACKやFUTUREに行くにしろ、まずは普通の居酒屋で飲んでから、その後店に向かうのが僕とクニオの定番コースになっていました。

ゲイスナックでワイワイやるのも楽しいのですが、最近の僕はこういった居酒屋で飲みながら話したりする時間の方が気に入っていました。JACKなどではなかなか真面目な話は雰囲気的に出来ないし、いわゆる「酒場の会話」だけでは何か物足りない部分もあったのです。

居酒屋で、テーブルを挟んで向かい合って、お互いの顔を見ながら話す、それだけでも、お互いがお互いをわかりあう速度は、スナックで飲むより数倍早いのではないかと感じていました。実際、僕とクニオが親密になっていったのは、バレーボールの試合を観戦した後に、初めて「普通の居酒屋」に二人で行ってからです。

「ハル、何かさつきからボケっとしてない？大丈夫？」

「・・・相変わらず待ちくたびれて疲れちゃったよ。」

「そんなことないでしょ・・・てか本当に疲れてるの？」

「ウソウソ。なんかさあ、待ってる間いろいろ考えちゃってねえ・・・」

僕とクニオは、僕がさつき思い出していた、「初体験」や、「その経緯」について、話していました。最初のうちは、普通の居酒屋で「ゲイに関する話題」を口にするのは、やはりためらいがありました。そのうえ、クニオが当たり前のように少し「オネエ口調」の混じった話し方をするもので、初めて一緒に行った居酒屋では、周りの目が気になってしょうがありませんでした。

ただ、慣れというのは恐ろしいもので、二回、三回と会って、居酒屋へ行ったり、普通に街を歩いていると、周りの目はあまり気にならなくなっていました。というよりは、「周りは、自分が思っているほど他人の事には興味がない」という事に気付いたのでしょうか。新宿という大きな街、知りあいとすれ違っても気づかないかもしれないこの街で、もし居酒屋で隣り合わせたサラリーマンたちが、「この二人、ゲイだな。」と気づいたところで、せいぜい一日か二日、僕とクニオが、彼らとその周りの人々の間で「オカマがいた」だとか、そんな感じの好奇的な話のタネにされるだけなのです。しかも、僕らが全く関与しないところで。

他人の目を気にしなさ過ぎるのも問題でしょうが、今まで僕は気にしすぎていたのではないかとも思いました。そういう意味ではクニオは僕とは正反対の性格で、もう少し他人の目を気にした方がいいんじゃないかと思うくらい、あけっぴろげな人でした。自分と真逆な性格のクニオだからこそ、僕は友達としてクニオのことが好きなのかもしれません。

「ハルもデビューしたてなのに、よく簡単についていったよねえ。あんまハルにそういうイメージなかったなあ。・・・ま、ハルも男で、やりたかったわけだ、ハハ。」

「・・・なんか変な言い方・・・。でも、そんな時はそうだったのかも。」

「で、その人の名前、教えてもらったの？」

「うん。そのあとすぐ聞いてみた。・・・ヒロシさんって人だった。」

「・・・アリガちな名前。本名じゃないんじゃない。」

「多分。でもわからないけど。」

「連絡先、交換しなかったの？」

「僕は初めて会った人には自宅のは教えられないし・・・でもあつちには教えてくれた。」

「その後連絡しなかったの？タイプだったんじゃないの？」

「うん・・・何でかわからないけど、出来なかった。会いたいような、でも会いたくないような。若かったから性欲の勢いでこうなっちゃったけど、なんか・・・。」

「・・・若かった、ってあんたまだ20だろうが。・・・腹立つわ。・・・若いのに考えすぎなのよ。勢いでもいいじゃない。それから何かまた始まるかもしれないんだし。俺の20の頃なんて、あんた、見せてやりたいというか、見せたくないというか・・・すごかったよ。遊びまくりで・・・今は多少落ち着いたけどさ。」

オネエ言葉を使うのに、一人称は「俺」な、独特な不思議な口調で、クニオは言いました。今年24になるクニオは、「落ち着いた」とは言っていない、僕とは違いファッションも髪型も、全体的な雰囲気も「派手」な印象でした。数えて3つ歳が離れているクニオですが、見た目は僕より若々しいくらいです。

小さい頃から外が嫌い、「内弁慶」だった僕は、同年代の子供が外で元気よく遊んでいるときもテレビや雑誌ばかり見ていました。3歳離れているクニオとも、そうだった理由からか、テレビ番組や芸能人の話題など、話が非常に合ったのです。

「クニオは、初体験の時のことって覚えてる？たしか16の時とか  
いってたよね。」

「そう。相手はその時、18って年齢ごまかして働いてたバーのママ。  
別に会っていきなりでもなかったし、嫌いじゃなかったし、・・・  
まあいい思い出ね。・・・でも、そうなった二人が一緒に働くと、  
なにかと問題が出てくるのよ。嫉妬とかさ。・・・だからすぐその  
店は辞めちゃった。」

「ふうん。難しいんだね。」

「・・・まあ、当時は好きだったのかとかあまり考えてなかったの  
よ。でも、営業とはいえ、相手が客に色目使ったり使われたり、俺  
が使ったり使われたり、仕方ないことだけど、目の前だからね・・・  
」

「スナックで働くのもいろいろ大変なんだ。」

「大変なわけじゃないけど、俺のその時の場合はね。・・・でも今  
でもやっぱ忘れないよね。初めての時のことは。ハルだって、忘れ  
ないと思うよ。今は複雑な思い出かもしれないけど、もう少し年取  
ったら笑って言えるような思い出になるわよ。そんなもんだから。」

お互いが、何となく当時の事を回想したのか、ふと二人の間にセン  
チメンタルな空気が流れたような気がしました。自分よりずっとい  
ろんな経験が豊富なクニオにも、「はじめて」の時がもちろんあっ  
て、僕も何年か後には、こんな風にいろんな思い出を笑いながら語  
っているのでしょうか。

「でさ、ハル。今日さ、ショットバー行かない？何かたまには気取  
って飲んでみるのもいいんじゃない？」

少し湿った空気を入れ替えるように、グラス片手に串焼きをついばみながら、クニオが言いました。

「シヨットバー、って聞いたことあるけど、ZAPP?」

僕は、JACKに貼ってあったフライヤーに、そんな感じの店があったことを思い出し言いました。

「そうそう、シヨット一杯700円位かな。結構いい男集まってるらしいよ。」

僕は考えました。居酒屋でクニオとひとしきり喋ったあとは、大抵JACKというのがお決まりのコースなのですが、たまにはちよつとシヤレたシヨットバーに行ってみたい気もしていました。

最近、楽しいわりには「マンネリ」感が否めないのは、慣れのせいもあるでしょうが、JACKへ行ってもFUTUREへ行っても、大抵知っている顔ばかりだというのもあるのでしょう。もちろん楽しい大好きな人たちですが、会って「ドキドキ」するということ感じではないのです。

恋がしたい、新しい出会いが欲しい、胸がドキドキするような出来事が欲しい、最近の僕はそう思っていました。それは、初めて二丁目に出る時の感覚にも似ていたかもしれませぬ。

「別にいいけど。」僕は短い思案のあと、出来るだけそっけなく言いました。

クニオは、串焼きを頬張りながら、きよとん、と顔をあげて

「本当?よかった、あそこ、俺が一人で入るのにはなんか綺麗すぎたき。。。じゃ、ちゃっちやと片づけて行くわよっ!」

そう言つて、まだ半分くらい残っているつまみなどを、猛烈な勢いで食べ始めました。

「え？まだ入つたばっかなのに・・・ちょよ、ちょっと、僕もまだ食べたい。」

僕はあわてて自分の割り箸を手に取りました。相変わらず決意から行動が遅い僕は、決めたとはいえ、もう少しここで心の準備をしたかったのです。

「あんたの、その心の準備が無駄な時間なのよ。」

クニオが、まるでそういふかのように、次々と皿を綺麗にしていきました。

### ナイアガラ - 3

「で、結局どうだったのよ？」

「なあんかさあ、俺って駄目ね。ああいう店行くと、ついきれいぶつちやってさ、いつも通り話せなくなんのよ。『くだよな。』とかハルに話しかけたりしちゃって・・・自分で笑っちゃうわよ。そのうち何か騒ぎたくなってきちゃって・・・結局1時間いたかないかよね、ハル？」

「うん。でも雰囲気違って、僕はいいと思うけどね。」

「なに、またあんたはきれいぶってんのよ。」

僕とクニオは、タカシさんを交えながらそんな会話をしていました。「ZAPP」へ行ったはいいものの、僕らにとっては、あまりに洒落た雰囲気になれず、1時間ほど粘ったあげく、僕らは結局JACKへやってきたのです。

「やつぱ飾らずに飲める店が一番だね。落ち着くなあ。」

僕はタカシさんに言いました。ZAPPも本当に雰囲気も悪くなく、客層も僕と同年代の人が多く見えました。薄暗い照明の中にいくつものライトの光が射し、店内には最新のダンスミュージックビデオが流れていました。カウンターは広く長く、30卓ほどの席は満席で、壁際に備え付けられたテーブルで立ち飲みをしているお客さんもたくさんいました。一人で来ている人も、見た感じ半分くらいはいるようで、ある人は少しうつむいて、テーブルのキャンドルライトをじつと見つめながら、お酒のグラスを時々口に運んでいました。ある人は、ミュージックビデオに目をやりながら体を小刻みに揺らし、リズムを取りながらタバコを吸っていました。

4、5人いる店員は、「バーテンダー」といった感じで、JACK

のように、お客さんに話しかけたりはしないようでした。ゲイヌナツクのように店員と客の会話を楽しむような店ではないようでした。まあ「ショットバー」というのはそういうものなのでしょう。

好きか嫌いかといった好みが分かれるところだと思いました。クニオのように、とにかく自分を思い切り出せる店で騒ぎたいという人もいれば、店員と話したりするのがどうしても苦手な人もいるでしょう。

僕はまだ経験が浅いせいか、「ZAPP」は新鮮に感じていましたし、今度一人で行ってみようかとも考えていました。あまりお洒落な店の行きつけがない僕は、ショットバーでも、一つくらいお洒落な気軽に行ける店も欲しいと思っていました。

それでも、今夜のように、最後にはこの「JACK」にたどりつくんだろうな、と考えていました。僕にとっては、一番落ち着く「家」のようなものなのでしょう。

僕の言葉に、タカシさんが言いました。

「ハル、あんたは少し飾った方がいいわよ。この2年、あんた男出来たことないじゃないの。行きずりじゃなくて。・・・あんた落ち着くには若いわよ。アタシくらいの歳になったらイヤでも落ち着いちやうんだからね。若くてかわいいんだから、あんたも出るところりやモテるだろうに・・・。」

あまりにしみじみとした表情でそう言うもので、正直僕も考えてしまいました。僕が最近考えている一番「イタイ」所でもありました。早く「彼氏」を連れて、このJACKと一緒に飲みに来たいとは思っているのです。僕がいま、一番叶えたい夢でした。ただ、そう簡単にはうまくいかないものです。

「やだ、ババくさい。てかママのどこが落ち着いてんの。」  
僕は何でもないような感じで、冗談交じりにタカシさんに言いました。

「まつ！この子は！口ばっか達者になって！」  
タカシさんは軽く僕の頭をはたいて、笑いながらそう言うと、ボックス席にいる4人ほどの団体のお客さんにつきました。

「おはようー、ハル、クニオ。いらっしやい。」  
目の前のカウンターの前に、店の従業員のトモがつきました。トモは僕が初めてJACKに行った日の少しあとに入った子でした。お互い、立場は違えど「初心者」意識の絆があつたのでしょうか。個人的に付き合いがあるわけではないのですが、かなり気を許して話せる相手でした。

「おはよう。また楽なところにさぼりにきたんでしょ。」  
冗談めかして僕がそう言うと、  
「いやー。怖い。そんなことないわよ。」  
必要以上に大げさな身振りをしながらトモが言いました。それを見て、僕もクニオも笑いました。ふと、有線の音楽が途切れました。誰かがカラオケをリクエストしたようです。いつもと同じ夜が始まった、そんな感じでした。

他のお客さんのカラオケに拍手や合の手をしたり、ZAPPでの話や、たわいもない話をしながら時間が過ぎていきました。今夜入れた焼酎のボトルが三分の一ぐらい減った頃でしょうか、また一回りして僕らの前に戻ってきたトモが、ふと、何かを思い出したかのよ

うに、言いました。

「ハル、もううちの店来始めて2年でしょ。さっきママにも彼氏がどうのこうの言われてたみたいだけど・・・まあ彼氏出来ないってのはとりあえずおいといて、うちの店のお客さんでいいと思った人とかいないわけ？」

そう言われて、ほんの少し僕は身構えました。

「そうよね。あんた一応若いし、見た目悪くはないんだから、まあ俺にとつてはブスだけど。作ろうと思えば作れるんじゃない？彼氏。この店だつてそれなりにいい男来るしさあ。あんた理想高いんじゃないの？」

「あんた、ブスつて・・・！」

クニオの毒舌に半分笑つて半分怒つて、僕は言いました。笑つてクニオをはたいて、この会話も終わるような感じの流れだと思っていました。。

すると、少し声をひそめる感じで、トモが言いました。

「これ、ここだけの話よ。」

僕とクニオはきよとん、としてトモの方を向き、次の言葉を待ちました。

「・・・名前は絶対秘密つて言われてるから言えないんだけどね。ある常連のお客さんで、ハルのことすつごく気に入ってる人がいるのよ。これ、酒場の会話にもしてほしくないって言ってたから、マ

マにも言わないですよ。・・・でもさ、そこまで言ってるってことは、結構本気なのかな、って思ったのよね。」

僕とクニオは、顔を見合わせました。

僕と言えば、うれしいのですが、何しろそう言ってくれてる人の正体がわからないので、複雑でした。

「へえ、その人、キモイ専かしらね。てか、トモ！教えな！」

クニオは相変わらずの毒舌の後、トモに詰め寄っていました。

正直、僕にも苦手なお客さんや、タイプじゃないお客さんもいましたし、そういった人にそう言われているとしたなら微妙な感じでした。それでも、こんな僕を気に入ってくれているという事は素直にうれしいことでしたし、もしその人の名前を知ったら、もし次にその人に会った時、その人の事を少し好意的に見てしまいたいような、そんな現金な自分もいました。

「ダメダメ、本当にダメって言われてんの。」

トモが、相変わらず大げさな身振りで、クニオに首を振っています。「でも、なんであんなにだけ、そんなこと言ってるの？その人。」

クニオの疑問は、僕の疑問でもありました。酒場の会話にもして欲しくないって事を、なぜトモには言うのだろうか、もしかして、個人的にトモと付き合いがある人なのか、それとも、冗談で言ったのをトモが大げさに言っているだけなのか・・・、努めて冷静なフリをしながら、その実、僕は、その人が誰なのか、心の中で考えをめぐらせていました。

「・・・もう、これ以上言わないわよ！・・・私が入ったばつかくらいの時かな。その人めっちゃ酔っ払ってね。・・・あ、普段めつたに酔わない人ね。なんか、彼氏と別れる云々でもめたらしく、割と荒れてたのかな。でも、最後の方は泣きがはいつてきたのよ。」

ちようどお客さんも他にいなくて、ママも外出中でね。酔った勢いだったのか、そのうちいきなり、ハルちゃん可愛い、ハルちゃん可愛い言い出すのよ。私もお互い「初心者」ってことで仲良くなつてたし、ハルの話になると何か聞きたくなるじゃない。・・・したらさ。彼に別れ話したのは自分からなんだって。何回か店でハルと話して、すっごく好きになっちゃったんだってさ。・・・ここまでよ。そうとうヒント言っちゃったわ。あとは二人で想像してよ。・・・あんたらだから話したんだから、絶対口外しちゃだめよ！」

へえ、とでも言うかのように、クニオが僕の方を向いて少し笑いました。

僕は、そんな風に見てくれている人がいたとは思っていませんでしたし、正直意外な気持ちでした。トモが入ったばかりという事は、もう2年前の話になります。なんでその時言ってくれなかったんだろう、と僕は思いました。

「でもね、その話はその時つきりしてないのよ。私もその人と個人的にお付き合いあるほど仲良いわけじゃないし、お店に来てくれた時に仲良く喋るくらいだから。まだ来るお客さんだけど、あっちもその話してこないし、私も『言わないで』ってその時言われたもんだから、あっちがしてこない限りはその話に触れないようにするしさ。もう2年も前のことだから、今はどうなのかはわかんないの。」

トモが僕の気持ちを静めるように、そう言いました。

それを聞くと、現在進行形だったような気持ちだが、急速に萎えていくような感覚になりました。もう2年も前の話なら、この先、その人の気持ちはどうあれ、この話が進行することはないように思えたのです。自分で言うのもなんですが、2年前、僕はJACKに来たので、右も左もわからない「ウブ」な少年だったわけです。誰かしらが「可愛い」と思ってくれたとしても、不思議はないと思えました。

そう思うと、何故か気持ちは楽になったような気がしました。

「なあんだ。2年も前だったら、ハルも本当に初々しくて可愛かった頃でしょ。しかも18の頃だもんね。そりゃ可愛いわ。今じゃねえ……。」

クニオがちょっとガツカリしたような口調で言いました。

「今じゃ、なによっ!！」

僕はちょっとおどけた感じでクニオの肩をはたきながら笑いました。

「トモ、カラオケ本貸して。」

僕はほんの少しの落胆も感じながら、それでもそう思っていてくれた人がいた事に喜びを感じて、少し浮かれていました。

「ちょっと、ナミエの新曲、あんたもう唄えるの?」

さっき入れたカラオケの前奏が流れ始めるとクニオが驚き気味に言

いました。

僕は、画面を見ながら声に出さずにうなずいて、歌い始めていました。いつもの楽しい夜が、またいつもの楽しい夜に戻った、そんな感覚でした。

煙草やお酒の匂いがあるとなく染みついたような気がして、朝帰りの家路は少しだけ肌に不快感を感じます。疲れもあるのでしよう。

あれから何度同じような朝を迎えているでしょう。早朝なのにこつた返すJRの新宿駅、茶髪に染めた髪と、黒いスーツを着た若いホストや、そのお客さんなのか、若い女性がやけに目に付きます。眠そうな目をしたサラリーマンもすでにいますが、なんとなく早朝の新宿駅には、まだ夜の続きのような雰囲気を感じていました。

僕はその雰囲気あまり好きになれなくて、いつも出来るだけ空いた車両に乗り込んでいました。

山手線を池袋で降り、地下通路をそのまま西武線の乗り場に向かいます。新宿ほどではないにせよ、下り方面からの電車が到着すると、通路はこんな時間でも人があふれます。

見なれた風景になっていました。これから出勤する人々を横目に、僕は下り方面の空いた電車に乗り込みます。多少まだお酒が残っていて、座席に着くと、けだるい気分が僕を襲います。練馬まではそんなに駅数は無いので、眠らないように、通路の上に掲げられた広告を見るともなしに眺めていました。

練馬の駅に降り立つと、僕は南口の目の前の大通りを右に進みました。途中あるコンビニで、寝る前に食べる軽い弁当と飲料を買うのが朝帰りの常になっていました。いくつか目の十字路を左に折れると、僕の住むマンションはすぐでした。

この時間だとまだ両親とも起きてはいない時間でした。

別に朝帰りをとがめられる訳ではないのですが、それでも何となくうしろめたいような気持ちがありました。最近は一丁目に出れば朝までというのがあたりまえになっていました。毎週朝帰りをする息子に、何となく何かを言いたげな雰囲気も、最近の会話の中に感じていました。

エレベーターが開き、僕は部屋の鍵を取り出しながら廊下を歩きました。早朝は鍵を開錠する音すら響きません。僕は出来るだけひそやかに自宅のドアに鍵を差し込み、回転させました。

すると、いつもなら「パチン！」と開錠音がするはずなのですが、その音は無く、また指先にも開錠された感覚を感じませんでした。つまり、鍵はかかっていますでした。

「なに、危ないなあ。」

僕はそう呟きながら、ノブを回しドアを開けました。

いつもなら、まだ薄暗い玄関が、今日はなぜか電灯が点けっぱなしになっていました。それだけではなく、玄関も何となく靴が散乱しているような感じがします。

短い廊下を進んで、居間への扉を開けると、まだ誰も起きている気

配は無いのカーテンは開け放たれていました。というよりは、昨夜から開けられたままのような気配を感じました。

変な感じがしました。見なれた朝帰りの自宅なのに、何かがいつもと違うのです。

僕は、就寝している両親の部屋に行くことなどほとんどないので、今朝ばかりは何か嫌な感じがして、そつとそのドアをノックしました。

「おはよう、春彦だけど、朝からごめん、ちよつといい？」

返事はありませんでした。もう一度声をかけても、同じように何の返事也没有ませんでした。

「ごめん、ちよつと開けるよ。」

僕は、何となくドキドキしながら、そつと両親の部屋のドアを開けました。

いつもならまだ寝ているはずの両親の姿はありませんでした。

旅行行くとか言ってなかったよなあ・・・

こんな朝から出かけてるなんて、珍しいなあ・・・

そんなことを考えていた矢先でした。居間にある電話が鳴りました。

「はい、内田です。」

僕は受話器を取り、言いました。

言うが早いか受話器の向こうの相手は、せきをきった様な勢いでまくしたててきました。

「春彦？あんたどこ行ってたのよ！夜中も何度電話しても出ないし！どこほつつき歩いてんのよ！！」

ていうか、それはそれでいいわ。大変なのよ。お父さんとお母さん、交通事故に遭ったの。谷原近くの交差点で・・・自傷事故だから相手はいないんだけど、二人とも全身を強く圧迫されたとかで、危篤なのよ！

詳しいことは病院来てから。とにかく早く来て！板橋の日大病院だから！」

僕は、涙交じりで怒りながらも心細そうに、受話器の向こうの姉が話す内容をまるで現実とは思わずにいました。

受話器を置いた後も、早く行かなくてはいけないのはわかっているのに、いざ病院に着いてしまったら、両親の事故が本当の本当に「現実」になってしまふのが怖くて、開きっぱなしのカーテンを閉めたり、玄関の靴を揃えたりしていました。

再度身支度を整えた後、コンビニで買った弁当が、テーブルの上で袋からはみ出て逆さまになっている姿を、少しの間ぼんやりと眺めていました。

## 二度目の出会い - 1

始業5分前のチャイムが鳴ると、更衣室は一気に混みはじめます。塵を防ぐマスクをはめ、「防塵服」と呼ばれる、まるで宇宙服のような白衣を身にまとい、特殊なビニール製の手袋をはめたその手を、さらに水洗いします。

実際の仕事場に行くには、このあと「エアークシャワー」をくぐり抜けなくてはなりません。日常生活は、眼には見えないけれど、「チリ」や「ホコリ」に囲まれています。僕がいま働く職場で製造している製品は、「チリ」や「ホコリ」を最も嫌う「精密部品」でした。定員3名のエアークシャワーが2機並んでいます。入り口の扉を閉めると、右から左から、あらゆる角度から飛び出したエアーク噴出口から、十数秒エアークが噴き出し続けます。噴出口の角度は、一件適当にも見えるのですが、実は体に付着した塵などを効率よく除去するために、ちゃんと計算された角度に設定されていると聞きました。エアークが吹いている間、僕たちはその場でゆっくり回ったり、体についた塵を少しでも落とすために「防塵服」を着た体を軽くはたきまします。

十数秒後、エアークが止まると同時に、出口のロックが「カチツ」と音をたてて解錠されます。「出口」といっても、実際は僕らが働く「クリーンルーム」への「入口」です。

「おはようございます。」  
僕は挨拶をしながら自分の席へと向かいます。「クリーンルーム」の中では誰もが防塵服を着ています。一応胸に名札をつけてはいるのですが、頭の先から足の先まですっぽり防塵服に覆われているため、最初のうちは誰が誰なのか分からず、非常に戸惑ったものでした。

最近は後姿を見てもどの人かわかるほど、この職場にも慣れてきていました。

僕が自分の席に着くと、椅子を引く音で我に返ったのか、隣の席のトオルが体を一瞬ピクリとさせて、こちらを向きました。

「おはよう。眠そうだね。」

僕が話しかけると、トオルは防塵服の下の寝ぼけ眼をパチパチさせて言いました。

「眠い・・・かな。おはよ。ハル。今日もがんばんべ。」

「・・・頑張るって声じゃないね。昨日言ってたCD持ってきたよ。」

「マジ？いつでもいいって言ったのに・・・早いな、サンキュ。」

僕は自分の席に着き、隣の席のトオルと話し始めました。防塵服とマスクが、耳も口も覆っているせいで、初めのうちは相手の言葉を聞きとるのにも一苦労でした。逆に、自分の言葉も小さい声では伝わらないのです。ただでさえ空調の音や機械の音が絶えず騒がしい職場です。大きな声で話すのが苦手だった僕は、やはりここでも戸惑いました。それでも働き始めて半年経たないうちに、それにも慣れたのか気にならなくなりました。人は何だかんだ言っても「適応能力」というものを持っているのでしょうか。

始業時間が近づくとつれ、エアシャワーから人がひっきりなしに入ってきます。エアシャワーが噴いては止まりドアが開き、噴いては止まりドアが開き、そんな繰り返しを、僕はトオルとたわいもない会話をしながら、ただ眺めていました。

キンコン、カーンコン。

時計の針が8時30分を指し、始業のチャイムが鳴りました。ここ

「HDK株式会社浜名湖工場」の朝は朝礼から始まります。

「・・・さてつ、と。」

少しかつたるそうに重い腰を上げるトオルを、すでに席から立ち上がっていた僕は横目で笑いながら見ていました。

あの日、僕が病院に着いた時、すでに両親は亡くなっていました。ハンドル操作の誤りで、幹線道路のアンダーパスの側壁に激突したとのことでした。

正直、あまりその時のことは思い出せません。警察や病院の対応は全て2歳年上の姉に任せていました。というよりは、僕に任せられる状態ではなかったのだと思います。

救いだっただのが自傷事故だけで済んだことだ、と言われました。

病院の霊安室で、すでに亡骸になった父と母は、まるでドラマに出てくると全く同じように、顔に白い布をかけられていました。簡単な仏壇のようなものの傍らに白い口ウソクが二本灯され、その炎がゆらゆらと揺れていました。

体の損傷が割とひどかったと聞かされ、僕は対面するのをためらっていました。

「ちゃんと見てあげなきゃダメだよ。顔は全然無事だったから。」  
姉がそう優しく言いました。僕も最期を看取れなかった分、両親の死に様はしっかりこの目に焼き付けなくてはと思っていました。損傷した体や、遺体を見るのが怖いのではないのです。この布をめくった瞬間、両親の「死」を確実に認めなくてはならないということが、怖くてしようがなかったのです。

それでも姉に促され、ぼくは覚悟を決めて、顔にかけられた白い布をめくりました。

涙が出て止まりませんでした。

苦しかっただろうに、痛かっただろうに、それでも両親ともに、死に顔はとても安らかな表情をしていました。頬や唇がわずかに血に染まっていることを除けば、まるで眠っているかのような表情でした。

僕は既に冷たいその父の顔を、手のひらでそつと撫でました。初めてこんな形で撫でる両親の頬は、骨ばっていて、肌にはシワが刻み込まれていました。

両親が事故を起こしたのは、あの日の夜8時頃だったそうです。当時は、僕は携帯やPHSは持っていませんでした。

僕は両親が苦しんでいる時に、何をしていたんだろう、と深く後悔しました。あの日はクニオと待ち合わせて居酒屋、ショットバー、JACKと飲み歩いていました。

デビューした頃の初体験の話、いい男が集まると評判のバーへの探索、JACKでの色恋話で浮かれた自分。そんなふうに僕が浮かれて楽しんでいた頃、両親は痛みと苦しみと闘っていたはずなのです。

そんな時に僕は、なんてくだらないことをしていたんだろう、と思いました。当時、朝まで飲んだりすることが増えた影響で、確実に両親と話す機会も減っていました。僕も、特別両親と仲が良かったとは言いません。世間のよくある感じの家族だったと思います。

ただ、2歳上の姉が若くして結婚し、練馬の家を出てからは、両親と僕の3人暮らしでした。自分の子供が一人家を出ると、親からしたら、やはりさみしかったのでしょうか。

「たまには3人で外にご飯食べに行くか。」などと、父が遠慮がちに誘ってきたこともありました。僕はその日も二丁目に飲みに出る

約束があつたため、断りました。

そんな誘いが何回か繰り返され、そのたび僕は断っていました。正直、当時は親との時間よりも、二丁目での時間が楽しかったですし、大切にしていたのです。

なんで、二丁目で遊んではかりいたのだろう、せめてあの夜だけでも自宅にいたら、もしかして事故は起きなかったかもしれない、たとえ起きたとしても、最期を看取ることができたはず、考えても仕方ないのはわかっているのですが、あまりにも突然の出来事に後悔は止まりません。

あの頃の僕は、二丁目に飲みに出て、ゲイライフを楽しむ、「それだけ」になり過ぎていたような気がします。僕はゲイですし、自分が一番解放される町で楽しむのが悪いこととは思いません。ただそれは飲み代としてとっておく、休み前の夜は必ず予定を空けておく、そんな事ばかり考えているような時間やお金のやりくりをしていました。

自分のことしか考えていなかったのかもしれませんが。自分が自分らしく、自分が楽しく、自分の事だけを考えて、周りに当たり前のようにあつた「大切なもの」を見失っていた部分もあつたと思います。若かつたから、突っ走って、それだけしか見えなくなってしまうというのは、こういう事なのかもしれない、と思いました。それでも今回失つたものは、二度と取り戻すことの出来ないものでした。後悔しても、もう両親は帰らないのです。それでも僕はあの夜に飲み歩いていた事を後悔ばかりしていました。

両親ともに、兄弟家族が無く、形だけの密葬を姉と共に済ませました。親戚も何も無く、僕と姉と、姉の旦那さんと二人のまだ幼い子

供、たった五人で両親を見送りました。  
姉の旦那さんが何かと力になってくれ、滞りなく四十九日を迎え納骨も済ませました。

やっとひと段落ついたあと、僕は久しぶりにクニオに電話をかけ、今回の事を報告しました。クニオは受話器の向こうで絶句していました。

「なんですぐ電話くれなかったの！」

「ご甲問させて欲しかった！」

やっと声を発したかと思うと、クニオは立て続けに僕を軽く叱責しました。

「ごめん……。」

僕はそれだけしか言えませんでした。クニオなりに僕の事を心配してくれているのが、その口調から痛いほどわかったからです。

「これからどうするの？」

しばらくの沈黙の後、クニオは言いました。

それは一番今から考えなくてはならないことでしたが、まだ何も具体的な答えは出ていませんでした。姉と話して考える、と、曖昧な返事を僕は返しました。

僕は、あの日に飲み歩いていた自分が悔しい、とクニオにこぼしました。

「親が死ぬことわかって飲み歩く奴なんていないよ。後悔する気持ちはわかるけど、ハルは悪くなんかないよ。」

クニオはそう言って僕をなくさめました。

たぶんそれは正しいのです。僕とクニオの立場が逆だとしたら、僕も同じことをクニオに言うでしょう。それでもどこかやりきれない気持ちが残るのです。

「落ち着いたら電話して。飲みながらいろいろ話そうよ。」  
クニオのその言葉に、うん、と答えて僕は受話器を置きました。

四十九日も過ぎ、考えてばかりはいられませんでした。

両親の残してくれた微々たる蓄えで、あと何ヶ月かはこのマンションの家賃くらいは払っていけそうですが、いよいよ自分の身の振り方を考えなくてはなりませんでした。

もともと家族四人で住んでいたこのマンションに僕一人は広すぎますし、またこの先家賃を払っていける見込みはありません。ここを出るしかないということは、確実に決定事項でした。

姉は4年前に結婚し、すでに2人の子供を設けていました。旦那さんはルート配送のトラックの運転手をしていました。カラッとした気持ちのいい性格の持ち主で、今回も、

「良かったら家に来いよ。狭いしがキはウルサーけど、歓迎するぞ。」

と、優しい言葉をかけてくれていました。

それでも僕は、姉夫婦にはなるべく世話にならない道を選びたいと思っていました。まだ若い姉夫婦、2人の子供を抱えての生活は余裕があるはずがありません。僕が行けば、また余計な出費もかかるでしょう。僕も20歳でしたし、一人でもなんとかやっていきたいと思っていました。姉夫婦も18歳と20歳で結婚して、苦しいながらもここまでやってきているのです。僕だって負けるわけにいかないと思っていました。

金銭的な事を考えれば、練馬のマンションにいられるのもあと2か月という感じでした。引越しを決めたにしても、両親の残した家具など、処分しなくてはならないものなどがまだ多くありました。

自分の気持ちがまだなんとなく落ち着かないまま、それでもやるべき事がまだまだありました。それでもバイトにも行かなくてはならないし、なかなか自分の身の振り方を決められずにいました。

「家に来ればいいのに。あんた、もう二人っきりの姉弟なんだからね……。でも一人でやっていきたいって言うんなら、寮付きの仕事とかも探してみたら？引越しかかる費用も結構するよ。うちもだしてあげられる余裕無くて悪いけどさ……。でも寮付きならそういうのからじゃない？新聞配達とか水商売とかパチンコ屋とか、確かあるわよ。……。それでも、どうしても決まらなければ、うちに来ればいいしさ。」

ある日、姉に相談の電話をした時、姉が優しくそう言いました。最後に頼つていい場所をさりげなく用意してくれるその言葉に、僕は励まされました。結婚して、妻となり母となった姉は、何だかとても強くなったような気がしました。そして無条件で受け入れてくれる包容力を感じました。それは、両親が当たり前のようになしてくれていたものにも似ていて、改めて僕は失ったものの大きさにも気付いたのです。

姉のアドバイスを受けて、僕は求人雑誌の「寮付き」に的を絞って、ページをめくり始めました。

思ったよりも多くの「寮付き」の仕事の求人があることに僕は驚きました。姉が言うように、パチンコ、新聞配達の仕事も多く掲載されていましたが、それよりも「月収25〜34万可能」「ワンルーム寮完備」「カバン一つで赴任」といった文句が目立つ、地方での製造工の派遣社員の求人がその多くを占めていました。僕は、地方

に行く考えを全く持っていないだったので、こういった求人広告はいつもスルーしていたのですが、確かに地方に赴任する仕事だけあってほとんどの仕事は「寮付き」でした。

広告を眺めていると、東京をいったん離れるのもいいかもしれない、と思い始めました。

あれから、僕は一度も二丁目に飲みに行っていないませんでした。まだ飲みに行っても心から楽しめる心の余裕がありませんでした。何となく、両親に対しての罪悪感もまだ残っていました。もちろんこの先の生活を考えると、今までしてきたようなお金の使い方は出来ない、というのもありました。

でも何よりも、心機一転したかったです。両親のことがあってからの僕は、何をすることも無気力になっていました。環境を変えて、仕事も変えたら、気持ちも変わるかもしれない、求人雑誌をめぐりながら、僕の気持ちはだんだんと、地方で働いてみたい、という方向に傾いて行きました。

僕は本格的に求人広告を読み始めました。地方に行くにしても、どうしてもゆずりたくない条件もありました。

他人と住むのは抵抗がありましたから、ワンルームの寮がある場所。体力にそれほど自信が無いので、力よりは、手先の繊細さが必要な製品を作る工場。東京を離れるにしても、あまりに遠くはちよつと抵抗があるので、行っても北は福島、南は三重。

その他、給料、時間帯など、自分の希望条件を絞って読み進めていきました。

最終的に、自分なりの条件のなかで残ったのが、宇都宮のレンズ工場、静岡の光部品製造工場でした。

求人広告で見る限り、そういった業界では大手と思われる派遣会社

に、詳しい話を聞きがてら面接を受けに行ったのは、それから数日後でした。

「え？なんて？」姉が聞き返しました。

「だから、浜松行くことになったんだって。」

「浜松？・・・何しに行くのよ。」

姉に、浜松へ行くことを電話で告げると、姉は最初は旅行に行くのかと思ったようでした。寮付きの仕事といっても、まさか浜松へ行くとは思っていなかったのでしょうか。

僕は詳しく姉に話しました。浜松の光製造部品工場で働くという、今の僕が選んだ道についてある程度話し終えると、黙って聞いていた姉が、何とも言えない溜息を吐いたあと、言いました。

「・・・まあ、あんたもまだ若いし、男だし、少し一人でやってみるのもいいかもね。あんたも少しはたくましくなれるかもしれないわね。・・・でも、どうしても辛くなったら時はうちに帰ってきなさいよ。遠慮なんていららないんだから。」

そして、優しい声で笑いました。僕は何となく心細くなったのと、「いつでも帰っておいで」と言う言葉がうれしくて、気づかれないように涙をこらえていました。

それから、めまぐるしい毎日でした。コンビニのバイト先に退職を告げましたが、突然決まったことだったため、人員の関係で出発数日前までは働かなくてはなりません。そんな中、浜松に赴任するために必要な書類を揃えたり、スポーツバッグ二つ分のとりあえずの荷造りをしたり、持って行けないものは姉の家に送ったり、忙しい毎日が続きました。

そして、練馬の自宅の後片付けや退去の手続きなど、自分で出来る部分がある程度終え、最低限出来ないことだけは姉に託して、面接を受けてから三週間後、僕は一人、浜松へと旅立ったのです。

新幹線の車窓から眺める富士山や、太平洋を見ながら、僕は

「ああ、今から本当に浜松での生活が始まるんだなあ。」  
と実感していました。

スポーツバッグの中には、両親の形見の指輪が二つと、姉夫婦からの志、そして、一昨日、久し振りに行ったJACKでもらった、タカシさんをはじめ、JACKのみんなからの寄せ書きが、ひとつの巾着袋にまとめて入っていました。僕はそれらを袋の上から撫でながら、JACKでクニオが言った言葉を思い出ししていました。

「頑張らなくていいから、早く帰ってきなさいよ！あんたいなくなったら俺は誰と遊ぶのよ。とつと尻尾巻いて帰ってきなさい、バカ。……でも、ハル、……頑張りなさいね……。」

痛いほどクニオの気持ちがわかる言葉に、僕もクニオも、お酒のせいにして少し泣きました。

「自分が大事にしたいもの」にそつと触れながら、僕は大きく深呼吸しました。

いつまで頑張るか、全く決めたりはしていませんでした。それでも「頑張れ」といつてくれた人たちのためにも、ある程度の期間は浜松で頑張ろうと思っていました。

それでも、期待よりも不安のほうが先行します。初めての土地、初めての一人暮らし、初めての仕事、初めての職場、初めてばかりがこの先に待ち受けているのです。

「みんな、見守ってね。」

僕は巾着袋を少し強く握りしめて、そっと目を閉じました。

こうして、僕の浜松での新生活が始まったのです。

## 二度目の出会い - 2

昼休みの食堂はいつものように混み合っていました。麺類、カレー、定食ごとに分かれたカウンターには長蛇の列がまだ続いていました。もともとがそんなに広い食堂ではありません。その上、最近の増産のために外部の派遣会社から毎週のように人員が増員されていました。東南アジアの工場からの研修生が先月からこの工場に50名ほどやってきていました。二班に分けて休憩時間を30分ずらしたり、対策はしているものの、それでも昼食時の食堂は人でごったがえしていました。

相変わらず人ごみがあまり得意でない僕は、最近は食堂の横にある売店でパンを買い、喫煙所の中に備え付けてあるソファーに座って、一人食事をしていました。

しばらくすると、食堂側の入り口から、一人の男性、というよりはまだ20、21歳くらいの少年が食事を終えたらしく、確かめるように周りをきよるきよる見回して、恐る恐るといった様子で喫煙所に入ってきました。

彼は、僕から少し離れた場所でタバコをどこか遠慮がちに吸い始めました。まだアイロンのきいた真新しい制服を着ています。今朝の朝礼で、新しく入ってきた3名の新人が紹介されました。座りながら時折彼の顔を眺めると、今朝紹介されて同じ部署に配属された人だと気付きました。

防塵服を着ていると、更衣室で一緒にならない限りなかなか同じ部署の人の顔が覚えられません。それも時とともに解決はするのですが、僕も最初の頃は、それで落ち込んだり苦労したことを思い出していました。未だに新人さんの顔と名前はなかなか一致しないことが多いのです。

僕は、おもむろに立ち上がり、タバコを吸っている彼のそばに近づきました。ポケットから自分のタバコを取り出し、ライターで火を点けました。こっちに来てから、僕はタバコを吸い始めていました。

「今日から入った人だよ？仕事、どうですか？」

軽く一息吐きだしてから、僕は彼に声をかけました。彼は、少し驚いたような顔でこっちを向きましたが、ちよつとほつとしてくれたいような表情で、笑顔で答えました。

「あ、三階のユニット部の方ですか？スイマセン。気づかなくて……」

「ううん。防塵服着てるから、誰が誰だか外じゃなかかわからないでしょ。僕も最初はそうだったから。僕、同じユニットの内田です。ヨロシク。席も同じ島の反対側だと思っけど。」

「あ、自分は中村です。ヨロシクお願いします。」

「中村さんは地元の人ですか？」

「いえ、自分は鹿児島です。地元じゃなかなか仕事が無くて……内田さんは地元の方ですか？」

「ううん。僕は東京から。」

「ええー。東京だったらいくらでも仕事ありそうじゃないですか。僕らはそんな会話のやり取りをしていました。もうこっちにきてから3年半が過ぎていました。その間、何度こんな会話を新人さんと交わしてきたでしょう。派遣で働きに来ている人のほとんどは他県から来ていました。慣れた故郷を離れて、初めての土地、初めての職場で、心細い気持ちは僕も経験しただけによくわかります。最初のうちには自分だけで精いっぱいだった僕でしたが、だいぶ慣れてきてからは、新人さんが入ってきたらなるべく話しかけてみるようになっています。」

「内田さんはおいくつですか？」

「僕？もう24。中村さんは？」

「自分は25です。へえ、内田さん、20くらいかと思った。」

「僕も中村さん20、21くらいかと思ったよ。」  
そんな話をしながら僕らは少し笑いました。

僕もいつの間にか24歳になっていました。

「ミレニウム」と称される、2000年を目前にした1999年の初冬を迎えていました。誰かが言っていた「大予言」による世界の滅亡は起こるはずもなく、東京よりは過ごしやすい冬をこれから迎えようとしていました。

「浜松」といつても、正確には東海道線で愛知寄りに5駅ほどだった静岡県の西の果ての市に「HDK株式会社浜名湖工場」はありました。自転車で10分程走れば通勤できる場所に、僕が所属する「ネクスト」という派遣会社が借り上げのアパート寮を用意してくれました。会社と寮の途中にはいくつかのショッピングセンターもあり、買い物に困るといふこともありませんでした。あえていえば、自炊をほとんどしてこなかった僕にとつて、朝、夜と食事を用意しなくてはならなかったことが大変と言えば大変でしたが、初めての一人暮らしもこの頃ではかなり快適なものになってきていました。

「買い物とかもまあまあ便利だよ。東京に比べたらナンだけど、別に困ったりしないしね。大きな買い物だったら浜松に出ればなんでもあるしね。」

僕は新人の中村さんに、工場周辺や、浜松の案内をするかのような話をしていました。中村さんはニコニコしながら、その少年のような瞳を輝かせていました。僕はそれを見て、ああ、この人もいろんな気持ちを抱えてきつとここに来たんだろうな、僕も来たばかりの頃はこんな風に瞳を輝かせていたんだろうか、と考えていました。

キンコン、カーンコン。

予鈴のチャイムが鳴りました。ここでは、防塵服に着替える時間があるため、あらかじめ休憩終了の10分前に予鈴が鳴らされます。

「これ、12時50分の予鈴。一応休憩は13時までだけど、着替えの時間もあるからこれが鳴ったら戻る方がいいかもね。最初のうちは着替えも時間かかるだろうし、ギリギリだと更衣室メチャクチャ混むからね。」僕は中村さんにそう言いました。

「あ、はい。ありがとうございます。」

「じゃ、行きますか。」

そう言つて、僕と中村さんは食堂棟を出て、工場棟に向かって歩き始めました。

雲ひとつない晴れた青空は、東京で見るそれとはどこか違って、より青く、より広く感じられます。並んで歩きながら、僕はいつまでこの道でこの景色を見ながら歩き続けるんだろうな、などと漠然と考えていました。

職場では、手順と要領にさえ慣れてしまえば、順調すぎるほど順調に仕事を覚えていきました。細かい部品を顕微鏡を覗きながら接着したり、溶接したり、手先の繊細さが非常に必要な仕事でしたが、僕には合っていたのかもしれない。

人間関係にしても、いろんな地方から働きに来ている派遣社員が多いだけに、あまり地方独特の粘っこさみたいなものも感じず、それなりに仲良くやっていました。かなり年上のパートのおばさんたちにも、息子のような感覚なのか、割と可愛がってもらっていましたし、隣の席で仕事をしているトオルも新潟出身で、僕と同期で同じ歳ということもあり、親しくなっていました。

トオルとはじめて会ったのは「ネクスト」の浜松支社でした。当日赴任の人はまず支社に集合してから工場へ向かうスケジュールになつていたので。

赴任するにあたって、事務所でいくつかの書類を記入する必要があり、書き込んでいたのですが、ふと隣のトオルが僕の書類を覗き込んだのです。

「内田さん……っつーんですか。おれも内田。内田徹。ヨロシクな。」

と言って、トオルは自分の書類を僕に見せました。そこには大きな飛び跳ねそうな文字で「内田 徹」と記入されていました。

僕は、何となく話しかけられてうれしくて、

「あ、本当だ。夫婦みたいだね。内田春彦です。こちらこそヨロシク。」

などと、少し素っ頓狂な事を口走ってしまったのです。

トオルは少しの沈黙ののち、

「……普通兄弟とか家族みたいって言わねえ……？笑える。」と大笑いし始めました。少し僕は赤くなつてしまい、

「あ、そうか。」と一緒に笑つてしまいました。

トオルとはそれからの仲ですが、未だにたまに「夫婦」ネタで笑われます。それでも、ノンケに冗談でからかわれるのは決して不愉快ではありませんでしたし、楽しんでいました。

もしかして、少年時代にからかわれたのも、もしかして相手は冗談のつもりでしかなかったのかもしれない、と最近感じ始めています。少なくとも今の自分ならそれを気にすることもないような気がします。言葉をどうとらえて、どう受け止めるかは、自分の心次第なのかもしれません。自分がそこで泣けば「いじめ」にもなるし、

そこで笑えば「笑い話」になるのです。

それなりに「大人」になったということなのだと思います。体にしても、華奢だった僕は成長の速度が他人より遅かったのでしょうか、21歳直前に浜松へ来たその後くらいから、少しずつ骨格などが大きくなり始めました。もともと身長は180センチあったのですが、華奢だったころは「マツチ棒」のようだったのが、最近はやっと釣り合いのとれた肩幅になってきたような気がします。少なくとも僕の見かけを見ただけで「オカマ」みたいだからかわれることはなくなつたように感じていました。

体型だけではなく、世の中で生きていくには、「必要なウソ」も普通につけるようになっていました。たとえば会社では、僕は「東京に彼女がいて、とても大事に思っている、浮気もしない彼女一筋の男」ということになっていましたし、女性の話題になってもある程度は合わせられるようになりました。周りはほとんど年上ですし、それなりに大人なだけあって、高校時代のように女性の話題ばかりしていることもないのが大きいのもかもしれません。

浜松で「普通」に暮らしている分には、何も問題なく過ごせていました。少しずつですが、貯金もしていました。いつか東京に帰る日のためにと思い、始めた貯金は100万を少し超えていました。

帰ることを決めて、それなりに行動すればすぐにでも東京に帰ることが出来る額ではありませんが、僕は今のところはまだ具体的には考えていませんでした。今の職場にはそれなりに満足していましたが、収入や生活も安定していました。順調に働いて行けばもつと貯金も増えるでしょう。浜松や、職場付近の環境にも慣れて愛着も湧いていました。今の生活に満足していたのです。・・・たったひとつの事をのぞけば。

この3年半、たまに東京に帰った際にJACKへ行く以外は、いわゆる「ゲイ活動」は全くしていませんでした。

両親が亡くなってから、しばらく感じていた「罪悪感」はすでになくなっていました。あの頃クニオが言ってくれたように、両親があの夜亡くなったのは不幸な突然の事故でしたし、飲みに行くことで「罪悪感」をいつまでも感じることは、JACKや、クニオの存在を否定してしまうことのような気がしたのです。自分にとって大事な場所をひとつ失くした今、同じく大事な場所である、JACKやクニオのことも、より大事にしなくてはいけないと考えていました。それでも、行けるのは3か月に一度くらいでした。浜松から東京は新幹線で二時間の距離がありますし、交通費も片道で8000円ぐらいかかります。気軽に行ける距離でも金額でもありませんでした。

順調な浜松での生活、それでもたまにはイヤな出来事も起きますし、工場は完全週休二日制でしたから、いつもと同じ週末の休日には少し食傷気味でした。浜松へ出かけたり豊橋へ出かけたり、たまには名古屋まで足を伸ばしたりもしたのですが、日中に一人で行ける場所にも限りがありました。

たまにはゲイであるありのままの自分で、思い切り誰かと会話がしたい時があるのですが、東京へそのつど帰るわけにもいかず、かといってクニオとPHSで話すにも、通話料を気にすると、なかなかしょっちゅうかけるといふわけにはいきませんでした。

結局、近場にも、気軽に行ける「ゲイスナック」が欲しくなってきたのです。

例えば、両親が亡くなった頃も、二丁目での「ゲイライフ」に多少マンネリを感じていました。新しい出会いが欲しい、胸をときめかせたい、恋がしたい、そんな事ばかり感じていました。そんな矢先

に両親の事故が起きてしまい、しばらくはそんな気持ちが存在していたことも忘れていました。

浜松に来たことで、形は少し違えども、「新しい出会い」も「胸がドキドキ」も経験したわけです。その上慣れない土地での初めて尽くしだった訳ですから、本当に落ち着いてきたといえるのはここ1年くらいかもしれません。

「恋がしたい」

この1年間ずっと考えていました。例えば職場での片思いでも「恋」は「恋」なのでしょう。でも僕がしたいのはそういう「恋」ではありませんでした。やはり、僕にとって「かなう見込みのある恋」は職場にはないのです。僕は「かなう見込みのある恋」をしたかったのです。それにはやはり、ゲイが集まる場所、ゲイスナックに行かなければ出会いすらないなと思いました。

両親を亡くした直後ぐらいには、後悔とともに「くだらない」と感じた気持ちでした。それでも僕はその時の気持ちは忘れずにおこうと思いました。人が人を求めるのは寂しいからで、決してくだらないことではないはずです。くだらなかつたのは、そればかりになつていた自分自身で、多少大人になつた今の自分なら、そればかりになるということはないと思っていました。

などと、なんだかんだ自己肯定を続け、僕は浜松で数件あるゲイスナックへ飲みに行くことにしたのです。東京に比べて絶対的人数も少ないでしょうし、また二丁目のような町があるわけでもないのですが、駅の並びに不釣り合いなほどに高くそびえるアクトタワーからほど近い場所にその店がありました。一階がコンビニのビルの一階がその店のようです。僕は裏道に回り、店に入る階段を発見すると、いったんコンビニに入りコーヒーを買い、入口の灰皿付近で飲みながらタバコをふかしていました。

「相変わらずの、意味のない時間潰し、僕も変わんないなあ。」

小さな声で呟きながら、僕は少し笑っていました。

そして、2本目のタバコを吸い終わると、僕は迷わずさつき下見しておいた階段へと、まっすぐ歩いていきました

店の名は「DUB」と言いました。どこか入口のドアからして「洗練」された雰囲気で、ドアの向こうからは「ダンスミュージック」が重低音を響かせながら流れていました。ドアには「ダンスイベント」を告知する、センスのいいデザインのフライヤーが何枚か貼られていました。

なんとなくJACKとは違う雰囲気で、JACKのような店に慣れている僕はほんの少しドアを開けるのをためらいましたが、

「行って合わなければ行かなければいいんだし。」  
と、どこか覚悟を決めて、そのドアノブに手をかけました。JACKに初めて行った時の記憶が一瞬頭をよぎりました。

「いらっしゃいませー。」

ドアを開くと、まるで出口を求めているかのように、大音量のダンスミュージックが僕をめぐって流れてきたような感覚に襲われました。わりと広めな店内は、カウンターが10席ほど、ボックス席が3卓ほど、それとダンスフロアというのでしょうか、10人位が踊れそうなスペースが、ブラックライトに照らされてぽっかりと空いていました。イベントのある日はこのスペースも踊り好きなゲイたちで埋まるのでしょうか。

「どうぞ、こちらの席にー。」  
カウンターの中の若い店員が、カウンターの空いている席へ手のひらを向けました。僕は店員に軽く会釈をして、その席へと足を進めました。

その時でした。

「おい、おい、おいーっ!!」

いきなりカウンターの左はじの方から、BGMの大音量にも負けないくらいの大声が聞こえました。僕はびっくりして席に座れないままその方向を向きました。

びっくりしたのは、僕だけではありませんでした。カウンターに座っていた5、6人の他のお客さんも僕と同じようにその大声を発した人の方を向いていました。

他のお客さんの斜め45度の後頭部が並んだ先に、一人だけ、目を大きく見開いてこっちを、正確に言えば、僕の顔をまっすぐ見つめている顔がありました。さっきの大声の主でした。

うすくらいカウンターの、その先にあるその顔が誰のものなのか、やっと目が慣れて気づいた時、今度は僕が瞳を大きく見開いていました。

その顔は、僕を見つめながら、次第に「いつも通りの」いたずら小僧のような表情に戻って行きました。「彼」は、おもむろに席から

立ち上がって、僕の方へ近づいてきました。見なれた表情、見なれた歩き方、見なれた存在でした。

僕の中では「こんな場所」で会うことのない存在なはず、でした。

「ハル、・・・いつか会うだろうと思ってたよ。」

そう言って「トオル」は、僕に笑顔を向けました。

しばらく僕は何も言えず、ただうるさいダンスミュージックだけが頭の中を回転していました。

## 二度目の出会い - 3

「トオル！あんた何デカイ声出してんのよ！！なに、お知り合いなの？」

店員のその声で、僕は我に帰りました。トオルは僕をまっすぐ見つめていたその目をやっとその声が出た方向へとそらしました。

「ワリイ。うん、知り合い。ちょっと驚いちゃったもんで。ママ、俺とこいつ、ボックス席に移動。」

トオルは、僕の意見も聞かずにそう言うと、また僕の方を向いて、あっち、と声に出さずにボックス席の方向に首を振りました。トオルは持ったままのグラスを片手に、そのままボックス席へと歩いて行きました。

「じゃあ、彼も、そっち、ね。」

トオルが「ママ」と呼んでいた店員が僕にそう言いました。僕は軽くうなずいて、トオルの後をゆっくり歩いて行きました。

僕はボックス席に着くまでのほんの短い間、言い訳ばかり考えていました。トオルがゲイだとは思えないのです。「ゲイスナック」といっても、「男」であれば「ノンケ」でも入ることは出来るのです。

単にトオルにゲイの知り合いがいて、その関係で来てるだけかもしれない。

ノンケのちょっとした「観光気分」で、ゲイスナックに来てみたの

かもしれない。

僕も興味本位で来たってことにしようか……。  
ゲイスナックってことに気付かずに入っちゃったことにしようか……。

二丁目で飲んでいた時も、会社など、「二丁目以外の知り合い」に会うことなど皆無でした。それは、新宿という街の大きさもあつたのでしよう。当時勤めていたコンビニの誰かに会ったら、見られたらどうしよう、そんな気持ちは持っていながらも、「会うはずがない、見かけても気づかない」とどこか安心していました。

それが、浜松で初めて行ったゲイスナックで、会社の同期の同僚、しかもいつも隣で仕事をしているトオルに会ってしまうとは、夢にも思っていないませんでした。どうしよう、どうしようと思いつながら、僕は丸椅子に座るトオルの真向かいのソファに腰掛けました。

「ママ、グラス一個ちょうだい。……ハル、焼酎でいいよな？ ウーロン割りでいい？」

トオルはママと僕に順番に話しかけると、ママが持ってきたグラスに焼酎を注ぎました。ボトルにはひらがなで、「とーる！！」と、トオルらしい大きな、どこかに飛んで行きそうなヤンチャな文字で書かれていました。焼酎の瓶の首にはボトルナンバーのかかれた札がかけられていました。

「ほい、おまたせ。」

トオルが、ウーロン割りのグラスの下にコースターを添え、そのままテーブルを滑らせて僕にさし出しました。

「あ、ありがとう。」

僕はそれだけ言うと、どうしたらいいのかわからず、溶け始めたばかりのグラスの中の氷がパチパチ立てる音を聴いていました。トオルはしばらくテーブルに肘をつけて、組んだ指の上に自分の顎をのせたまま、じっと僕を見ていました。

「……とりあえず、乾杯するべ！」

ほんの少しの沈黙の後、トオルがそう言いながらグラスを持ちました。

「そうだね。……とりあえず何に乾杯する？」

僕は何かから話せばいいのかわからず、適当に会話をつなぐようにトオルに言いました。

「そうだなあ……。」

トオルはしばらく考え込むように視線を宙に泳がせました。こうしてみると、いつも職場でくだらない話をしているいつものトオルでした。同じ24歳なのに、どこか僕より子供っぽい表情で、可愛い悪だくみをいつも考えていそうなトオルは、職場でも人気がありました。僕がもし同期でなく、席が隣でなければ、仲良くなれたとは到底思えません。

「よっしゃ、決まった。」

宙を泳いでいた視線をさっと僕の顔に戻し、いつものいたずらっぽい表情で笑いながらトオルは言いました。

僕はウーロン割りのグラスを持ちました。

「いいよ。じゃ、何に乾杯？」

僕がそう問うと、トオルは鼻で少し笑いながら、少し照れくさそうにして言いました。

「笑うなよ。・・・とりあえず、『二度目の出会い』に、乾杯っ！」

ハハハッと笑ってグラスを鳴らした後、トオルはウーロン割りをグラス半分ほど一気に飲みはじめました。そんなトオルを見ながら、僕は、笑っていいのか、どうすればいいのか、何とも言えない気持ちでウーロン割りをちびちび飲み始めました。

店のママが、お通しやおつまみのスナックなどを運んできました。トオルは何やらママに小声で話していました。先ほどの会話や今の様子を見る限り、トオルが興味本位でここに初めて来たということはないそうです。ボトルをチャージしていることから、常連に近い客である可能性が高そうです。

僕はトオルが彼女持ちだと聞いていましたし、写真も見せてもらったことがあります。職場での女性に関する、ちよつと下劣な話にもジェスチャーを交えて話すほどでしたし、トオルが「ゲイ」だとはちよつと信じられないのです。

それでも、この店の「常連」であるということは、もし「ノンケ」でもゲイに理解があるタイプなのかもしれません。

僕の頭の中は、期待のような、不安のような、よくわからない気持ちがあふき返っていました。

目の前にいる「いつものトオル」に、気持ちはかなり落ち着いていましたが、これから先の「話」の展開がどうなるのか、僕は全く予想がつけられずにいました。



## 二度目の出会い - 4

「……ふう、これ、酒濃かったなあ。」

トオルはグラスのウーロン割りを半分ほど一気に飲み干してから、そのグラスをテーブルに置きました。僕の顔をちらりと一瞬見たかと思うと、すぐにタバコにせわしなく火を点けました。

トオルが吐き出した白い煙を見ながら、僕は、いつものトオルに見えていたけれど、やはりどこかいつもとは違うな、と感じていました。どこか落ち着かない感じで、足や肩を小刻みに揺らしていました。

そんなトオルの姿を見ていると、僕の気持ちは何となく落ち着いてきていました。僕がほのかに抱いている期待が裏切られる可能性は、限りなく少ないような気がしてきました。そう思い始めると、僕は早くトオルといろいろ話してみたくなくなってきました。

「……さつきさ、『いつか会おうと思ってた』って言ってたけど……  
・何で？」

僕がそう尋ねると、トオルはまだ三口ほどしか吸っていないタバコを灰皿に押し付け、僕の方に体を乗り出すようにして話し始めました。

「……そりゃあ、ネクストの事務所で初めて会った時からさ……  
・んー、何となく俺らってわかるじゃんよ。視線つーか、相手を見る目つきっていうか。ハルは俺より後に事務所に入ってきたんだよな。目が合った瞬間、なんとなく、な。おまえ、わかりやすかつたつーか。ハハ。」

おまけに、苗字が一緒だねって話しかけたら、『夫婦みたい!!』  
って・・・おまえ、ノンケの感覚じゃ言えないっつーの。目エキラ  
キラさせて言うもんだから、俺、おかしくて大笑いしちゃったけど、  
あ、こいつも多分ゲイだなって思ったんだよね。・・・でもうれし  
かったんだぜ。』

僕はなんとなく恥ずかしくなって、赤面していくのが自分でもわか  
りました。

「ていうか・・・目エキラキラさせてなんて言ってないよ!話しか  
けられて嬉しかったことは事実だけど!!」

「キラキラしてたぜえ。可愛いつつーか、笑えるっつーか。」

僕がちょっとムキになって否定すると、トオルはまた思い出したの  
か、クツ、クツと笑いだしました。僕はそんなトオルを見ながら少  
しむくれていましたが、頭の中では今トオルが言った言葉を思い返  
していました。

て、ことは・・・。

あ、そうなんだ。

トオルもゲイなんだ。

あっさりとしたものでした。確かにゲイスナックで偶然出くわした  
のですから、そういう展開が当たり前と言えば当たり前だったのか  
もしれません。さっきまでぐだぐだと、自分を取り繕う言い訳を考  
えていた自分が、少し恥ずかしく思えました。

トオルはひととおり笑いがおさまると、今度はちょっと真顔になっ

てつづけました。

「まあ、だからって、なかなか聞けないじゃん。お前ってゲイ?とか。俺だって自分のこと、会社では言えないし、・・・だって、「聞くこと」は「言うこと」にもつながるから。一方的に聞くだけじゃ、度を超えたからかいになっちゃいそうだし。自分は素直に確かめたいだけでも、周りはそう思わないだろ。かと言って二人きりの時は余計聞けない。それで、もし違ったらと思うと、今度は俺が怖い。俺だってやっぱ会社ではノンケで通してる訳だし。」

俺もハルも、別に見た目とかがそれっぽいわけじゃないしさ。それこそ毎日顔突き合わせて、そんなこと聞いてぎくしゃくするのもイヤだったし。だからあんまり会社ではそういうこと考えないようにして。」

それでも、ゲイスナックとか行ってるのかな、とかは思ってた。・・・だから、ここ、DUBって浜松で唯一若いゲイが集まる店だからさ。ここに通ってれば、ハルともしかして会うかもしれないな、って思ってたんだよね。・・・したら、今日、やっぱり、な。」

トオルの、まるでずっとこの店で僕を待っていたかのような言葉に、僕は何だか胸が熱くなっていました。トオルは本当にうれしそうに僕を見つめて話していました。

「この人はゲイだろうな」と、見極める事が出来る能力は、おそらくほとんどのゲイが持っているのではないかと思えます。言葉で言い表すのはとても難しいのですが、ゲイ同士のインスピレーションなのでしょうか。目を合わせただけで、何故か「わかる」部分があるのです。僕が二丁目に初めて行った時も同じことを感じましたし、以前働いていたコンビニのお客さんでも、そう感じる人が何人かいました。すべてが当たっているとは言いませんが、ほとんどそのイ

ンスピレーションは外れないと、僕は思っています。

ですから、トオルの言った言葉の意味が、僕にはとてもよくわかったのです。ゲイ同士でしか共感出来ない思いかもしれません。3年半も前に僕がゲイだろうと思いつながらも、聞けない、言えない気持ち、聞かないでくれる思い。すぐそばに同じゲイの仲間がいるかもしれないのに、たった一言が切り出せないその気持ち。その一言で、確実に何かが変わる可能性があるのに、「万が一の誤り」に対して、自分が抱えるリスクはあまりにも重いのです。

「俺のことは気づかなかった？・・・まあ俺、会社ではおちゃらけだしな。」

トオルのその言葉に、僕は、うん、と頷きました。

初めてトオルに出会った頃、僕は正直、あまりにバタバタと決まった出来事に追われていて疲れ切っていました。初めて事務所で顔を合わせた時も、新たな生活への緊張で、誰がゲイだとか、そんなことを考えている余裕は全くありませんでした。そんな中で始まったトオルとの職場での同僚生活でした。

僕は、かたくななぐらい「職場に出会いなんてあるはずがない」「職場で僕が恋などできるはずがない」という意識を持っていました。もっともそんな事を考えられるようになったのも、ここ1年くらいのことです。気づいた時にはトオルは「当たり前前に隣の席にいる同僚」という存在になってしまっていたのです。「男」として意識する時間も無く。

ですから、トオルに対しては「この人はゲイだ」というインスピレーションが全く働きませんでした。完全なノンケだとは思っていませんでした。この店で、いきなり叫んだお客さんが、トオルだ

ということに気づいた時も、「もしかしてトオルもゲイなのか？」という気持ちよりも、「なんでこんなところにトオルが？」と思っただぐらいなのです。うれしいよりも、ヤバイかな、という気持ちの方が強かったぐらいでした。

僕はトオルにいくつか尋ねました。

「だってさ、前、会社で彼女の写真、見せてくれたじゃない。」

「あ、あれ地元の仲いい女友達、それだけ。会社のやつが見せる見せろつるさいから、適当にくつついてる写真を一度持つてって見せただけ。てか、よく覚えてるな。」

「・・・たまにエロ話になるとノリノリで話に参加してるじゃない。変な話だけど、あそこの形がどうか、こうとか・・・。」

「俺、高校ん時は女と付き合ってたからね。おぼろげな記憶を何とか思い出して話にノッてるふりしてんのよ。カーーツ、泣けるね！」

あらためて聞けば、あっさりとしていて、それでいて納得のいく答えでした。

「ふうん。・・・でもトオルはすごく男っぽいね。僕はトオルがゲイだなんて思いもしなかった。たとえば、僕なんかは細いし見た目が弱つちいから、よく『オカマ』とかからかわれてたけど、トオルは見たまんま『男』って感じたもんね。話し方も野郎っぽいし。なんだかまだ信じられない。トオルが・・・ゲイだなんて。」

僕は、あらためて目の前のトオルを見ながら、言いました。

トオルは昔野球をやっていただけあって、肩幅も体の厚みもがっしりしています。涼しげな一重まぶたに大きめの鼻、厚ぼったい唇、もともとなのか野球部の部活のなごりなのか、色黒の肌に短めの髪

をワックスで立てています。パーカーに袖なしのダウンを重ね、ダボついたジーンズを引きずりながら歩く、その見た目もしくさも「男」そのものでした。

僕はといえば、最近肩幅も少しは広くなってきたとはいえ、幼い頃からスポーツにはまるで無縁の生活でしたから、筋肉というよりは「筋」のような、「生きていくのに最低限必要な筋肉」しか持っていませんでした。胃腸が弱いせいで贅肉や脂肪もほとんどついていませんでしたが、それが僕の貧弱さを一層際立たせていたのです。体の厚みもなく、まるでハンガーのような体型でした。トオルのような「スポーティー」なファッションは似合わず、どちらかと言えば体にフィットする「モード」系の服装を好んでいました。

トオルがさつき言っていたように、僕は、見る人が見たら確かに「わかりやすい」タイプなのだと思います。さつきトオルは「見た目でわかる感じじゃない」とは言ってくれましたが、浜松に来たばかりの頃は、職場でも一部の人が僕の事を「オカマっぽい」と噂していたことは知っています。言われ慣れた言葉ですから、今さら気にはしません。幼い頃から「オカマ」とからかわれていたわけですから、僕は多分そう見える雰囲気を持っているでしょう。

トオルのように、いわゆる「ノンケっぽい」ゲイは、僕の理想でした。こうなりたい、という意味でもあり、こういう人と付き合いたいという意味でも、です。

「そうかあ？・・・まあ『オカマ』っぽくはないと思うけど。でもバリバリのホモだぜえ。・・・俺さ、あんまり『ゲイだけ』の世界って好きじゃないんだよ。ノンケでもゲイでも、いいやつはいいやつだし、イヤなやつはイヤなやつじゃん。だから結構ノンケの付き合いの方が多かったりするし。だからいわゆる『ノンケっぽい』の

かもな。

まあ、ハルも職場で付き合ってる限り、まじめでまっすぐでいいやつだなと思ってたし。・・・多少細かいから、なよって見えるかもじゃないけど、しょうがねえよ。・・・どっちにしろ、俺もハルも同じ『ゲイ』なんだし、見た目なんてどうでもよくねえ？

・・・てかさ、うれしくねえ？こんな風に話出来るの。な、ハル、うれしい？」

トオルは、そう言って、楽しそうな表情で僕の顔を覗き込んできました。それが顔と顔の距離をかなり近づけたので、僕は一瞬ドキリとしてしまいました。

「な、どうよ。メツチャいろんな話出来るんだぜ、これから。」

僕の心臓の鼓動はまだおさまっていませんでした。そんな僕の動揺に、トオルは気づいてか気づいていないのか、そう問いかけてはさらに顔を近づけてきました。

目の前には、見なれたはずの、それでも僕の中では、昨日までとは確実に違うトオルの、いたずらっぽい笑顔がありました。

「う、うん。メツチャうれしいよ。すっごくうれしい！」

これからたくさん話したいし、ヨロシクね。」

僕はそう言って、まだグラスにほとんど残っているウーロン割りを一気に飲み干しました。自分が言った言葉がなんだか大げさで、照れくさく恥ずかしかったのと、目の前のトオルの顔があまりにも近すぎて、何だか変な気持ちになってしまいそうだったので。

それでも言った言葉は大げさでも何でもなく、本音でした。僕はトオルがゲイであったこと、そして今夜やっと「ゲイとしてのお互い」でまた出会えたことを、本当にうれしく感じていました。

これからもっともっとたくさん話して、トオルの事をわかっていき  
たいな。

初めてのゲイの友人である、クニオと、出会ったり仲良くなってい  
った時とは何か違う、初めて感じる気持ちに僕の中に生まれていま  
した。それはどこか甘酸っぱいような、胸が苦しいような、不思議  
な感情でした。

## 二度目の出会い - 5

僕とトオルは、それから早々にDUBを引き上げ、浜松の居酒屋へと場所を変えました。週末の居酒屋は騒々しく、周りを気にせず話すには、ちようどもってこいの場所でした。

「俺、正直あんまりゲイスナックって好きじゃないんだ。やかましいし、結構値段もするじゃん。まあ、それでもたまーに行きたくなるんだけどな。」

居酒屋で焼うどんを口に運びながら、トオルは言いました。DUBを出るときは、お腹が減ったから居酒屋で話しながら食べようという話だったので、トオルはああいうお店がちょっと苦手な場所を変えたかったのかもしれない。

確かに、何となく、僕がよく知っていた職場でのトオルはもつと元気いっぱい、いい意味でのおちゃらけで、DUBのような店は、「本当のトオル」の魅力が発揮される場所ではないのかもしれない、と僕は思いました。

今まで僕は、二丁目などで飲んでいる時が一番「自分でいられる」と思っていました。職場などでは誰かと会話をするにも「作ってる自分を感じていましたし、「本音で話せる場所」イコール「自分らしくいられる場所」だと思っていました。

でも「自分らしい」ってどういうことなのでしょう。職場での自分

も、ゲイスナックでの自分も、ちゃんとした「自分」であって、僕が僕であることには変わりがないのです。たとえば職場では、JACKで飲んでいる時のように、はじめて会話したりは出来ないけれど、仕事ぶりや話しぶりには僕の性格は確実に表れているでしょう。きつと僕らしい仕事ぶり、話しぶりに違いありません。たとえ「作ってる」部分があるにしても、その「作り方」にも「僕」が表れているのではないでしょうか。たとえば、トオルにだって「作ってる」部分はあるのだと思います。それでも、トオルが「元気で明るい性格」だということは間違いなくわかるのです。

最近少しだけそんなことを考えていました。違うのは「ゲイ」である事が言える環境か、そうでないか、というだけの事だけなのではないのでしょうか。そして、それがそんなに重要なことなのだろうか、とも考え始めていました。少なくとも、以前のように「ゲイ」だから、「ノンケ」だから、と区別する気持ちが薄れてきていたのです。大事なことは、もっと違うところにある、と何となく思い始めていました。

目の前にいるトオルを見ると、みんながみんな僕のように、「ゲイスナック」での時間がいちばん落ち着くわけではないんだな、ということがわかりました。僕にとつての「トオル」が、「職場でいつも見ているトオル」という先入観もあるかもしれませんが、「DUBでのトオル」は、いつもより控え目でしたし、大声で僕に向かって叫んだとき以外は、至って静かなものでした。職場でのトオルは、いつも仲間内の中心にいて、みんなを笑わせて突き抜けたような明るさで周りを楽しくさせる人でした。

僕は「ゲイスナック」は好きですが、その雰囲気はどうしても好きになれない、馴染めない、そうだった人もいるのだと思います。そういう人たちは、例えば東京に住んでいたとしたら「ZAPP」

のようなショットバーに行ったりするのかもしれませんが、そういった店が無い地方のゲイたちはどこへ行くのでしょうか。どこで出会うのでしょうか。どうやって寂しさや孤独感をいやすのでしょうか。

僕は、「出会いたければ、ゲイスナックへ行けばいい」と簡単に考えていた自分を少し反省していました。東京に住んでいて、恵まれた環境の中ではそれが可能でも、地方に住んでいる人や、スナックの雰囲気合が合わない人にとっては、それは難しいことだったので。東京に住んでいたら、きっと気づかないことだったと思います。

ビールを飲みながら、僕はいま考えたりしていた事を、トオルにとりともなく話していました。本当のところ、僕のこと、トオルのこと、例えば、どんな人がタイプなのか、とか、初めて目覚めたのはいつか、とか、「お互いのこと」について話したい、聞きたい気持ちでいっぱいでした。

3年半、顔を突き合わせてきた同僚なのです。お互いゲイであることがわかったにしろ、いきなりお互いの深い所に踏み込むのは怖くもありましたし、照れくさい部分がありました。

「別に、俺はスナック苦手じゃないよ。ただ、なんか、な。」

確かに自分がゲイであることは隠さずいられるけど、だからと言って、自分を思い切り出せるかっていうと・・・また違うかな。まあ、合う合わないの問題でしかないんじゃないかねえ？

しかし・・・ハル、おまえも小難しいこといろいろ考えてるんだなあ。別に地方のゲイは地方のゲイで、ハルに心配されなくてもいろいろやってるべ。心配すんなよ。・・・まあ、おまえらしいけどな。

トオルはそう言って笑いました。

トオルは翌日の日曜から地元の新潟へ帰省するとのこと、あまり時間もありませんでした。僕としては、せっかくのこんな夜なので、もっともつと話していたかったです。結局その後もとりのめのない話が続く、何となく消化不良のような気持ちを抱えながら、浜松から豊橋行き最終に間に合うように居酒屋を引き上げました。

電車の中は、土曜日の最終電車ということもあって結構混んでいました。職場の席や休憩室ではよく会話していたのに、混み合った電車の中で体が近付くと、何故か緊張してしまう僕がいました。よく考えれば、プライベートで会うことなど会社がらみでしかなかった、こんなに関近で顔を見ることも、こんなに体が近付くのも初めてだったのです。心の中で僕はそんな事を気にしながらも、僕たちは職場の同僚や、上司のうわさ話でゲラゲラ笑っていました。

20分ほどで最寄駅に着きました。僕らが暮らし働くこの町の中心の駅は、北側にすぐ浜名湖を臨み、南側には山を切り崩して造成されたと思われる、坂の多い町なみが広がります。タクシーが1、2台だけ停車している形だけの駅前ロータリーを横目に、僕とトオルは寮のアパートの方向へと歩き出しました。お互い、同じ方向に歩いて15分ほどの距離でした。

「いつ帰ってくるの？」

僕は何となく寂しいような気持ちになって、聞きました。

「水曜日の夕方。なんか、じいちゃんがちょっと体調悪いんだと。出来たらそばにいてやりたいんだけど、そうずつともいらねえし。だからまあ、3日くらいはな。じいちゃん孝行もしてやりてえし。」

「そっか・・・気をつけてね。」

トオルの言葉に、僕はそう答えました。寂しい気持ちが少し声に表れてしまったのかもしれませんが。

「なに？ハル、おまえ、俺に会えないから寂しがってんじゃないの？ハハ。」

トオルがおどけた調子で笑いながら僕に言いました。正直、凶星なのです。何故なのか僕は、休日である日曜は仕方ないにしても、普段なら職場で当たり前のように会える月、火、水と、三日間もトオルに会えないことが妙に寂しく感じられてしょうがなかったのです。

「・・・バカじゃん。んなことないよ。ちょっと聞いただけじゃん。」

僕は、そんな気持ちを悟られないよう、ぶっきらぼうなふりをしてそう答えるのが精いっぱいでした。トオルは、アハハッと空を見上げて笑っていました。

吐く息が少し白く染まり、空気が澄んできたような感じがする初冬の夜でした。空の色は東京のそれよりも一段と深く、高く、星がキラキラと輝きを増しているようでした。

しばらく歩くと、広い県道に出ました。僕のアパートはここから右に折れた市役所の裏手でした。トオルのアパートはここから左に折れた、マーケットの先でした。

「・・・じゃ、僕、こっちだから。新潟、気をつけて行っておいでね。おじいさん孝行、ちゃんとしてきなよ。」

僕は複雑な気持ちでそう言いました。心の中に「まだ一緒にいたいな」という気持ちがあつて、それでも「トオルは明日、朝早いし」という事情もあるので、何とかその気持ちを口に出さずに済んでいたのです。

いつだって会つていたのに、そしてこの先も会えるのに、なぜ今こんなに離れたくないのか、僕は自分で自分の気持ちがよくわかりませんでした。

「・・・おう。ハルも・・・襲われないように気いつけるよ。なんてな。じゃな。」

トオルは最後までジョークでおどけながら、そう言つて背中を手をふりました。

僕は少しだけその後ろ姿を見送つてから、自分のアパートへと歩き始めました。

広い県道沿いの道の歩道は、誰ひとりとして歩いていませんでした。浜松近郊とはいえ、浜松周辺自体が、基本的に電車やバスよりも自動車交通手段としてメインなのです。こんな夜中に、一人寂しく歩いている僕は、端から見たら奇異に映っているかもしれせん。街灯も少なく、時折乗用車やトラックの通り過ぎる音が途切れると、風が、渴いた草木を優しくサワサワと揺する音だけが耳をくすぐっていました。

何となく、僕は今夜の出来事が現実ではないような気がして、それでも確実に現実であることも実感して、ついさっきまでの、トオルと過ごした時間の事ばかり考えていました。こんな出会いもあるんだ、と、まるで嘘のような現実に、頭がボオツとしている感じでした。それでも、何か物足りないのです。もっと自分が話したいこと、聞きたいこと、たくさん話せばよかったな、と、僕は今更後悔したりしていました。

僕は、ふううー、と一つ息を吐きながら、ふと立ち止まり空を見上げました。真つ暗な空に輝く星を眺めながら、何となく初めて二丁目に出た時の事を思い出していました。

「そういえば、月が笑ってたっけ。」

僕はそう呟いて、ひととき大きく輝く月に視線を向けました。何番目の月なのでしょうか。今夜の月は、弦を外側に広げた、レモンのような形をしていました。

「今日は、・・・ボケつとした半開きの口って感じかな。」

何となくおかしくなって、へへ、と笑った後、僕は視線を前に戻し、また歩き始めました。

温暖な気候の浜松近郊とはいえども、さすがに初冬の夜中の気温はぐっと下がるようです。

「ちよつと寒いなあ・・・早く帰ろう。」

僕は気持ち歩くスピードを速めました。

そのうち、僕はふとある「音」がしてきたことに気付きました。

草木がさざめく音の中に、最初はどこかリズムカルなタツ、タツ、タツという音が聞こえてきました。はじめは何の音だろうとしか思っていないままでしたが、その音はだんだん背後に近付いてくるようでした。

僕は少し怖くなってきて、歩くスピードをさらに速めました。その音は確実に僕の背後へと近付いてきていました。それでも僕は怖くて振り向きませんでした。

ヤバい、走ろう。そう思った時です。

「ハル!!」

聞き覚えのある声が、僕の名を呼びました。びっくりして振り向くと、そこには息をハアハア言わせてこちらへ走ってくる、さっき別れたはずのトオルの姿がありました。

僕は、破裂しそうにドキドキしていた胸をそつと撫でおろしました。ホツとしたのと同時に、何とも言えない思いが込み上げていました。

「・・・ビツクリした。・・・トオル、どうしたの。そんな急いじやって。」

僕は正直胸が熱くなっていたのです。もしかしたら、僕が感じてい

たように、トオルも今夜の出会いが終わるのが、なごり惜しく感じ  
てくれているのではないかと思いました。それでも僕はなるべく平  
静を装って、普通にトオルに尋ねました。

トオルは、しばらく肩を上下させてハアハア白い息を吐いていまし  
たが、少し落ち着くと、息切れ混じりに一言言いました。

「おまえ・・・歩くの早えなあ・・・。酒飲んで走るの・・・キツ  
いわ。」

僕は、苦しそうにしているトオルの表情がなんだかおかしくて、少  
し声を出して笑ってしまいました。

「・・・何、笑ってんだよっ!!・・・はあ・・・。」

その言葉と表情がまたおかしくて、僕は笑い続けていました。

「落ち着けー。落ち着けー。」  
僕はそう言いながら、トオルの前のめりになっっている背中をさすり  
ました。

何気なく、息が早く整うようにやった事でしたが、ダウンジャケット  
ト越しても感じられるトオルのがっしりとした体つきの感触に気付  
いて、僕はどこか、自分がいやらしいような、胸が苦しいような、  
変な気持ちになっていました。そのくせ心のどこかでは、「そんな  
つもりでやってるんじゃないし」と言い訳をしていました。

やっと息の整ったトオルは、ゆっくり顔をあげて、体を伸ばしました。僕はそつと、その背中をさすっていた手のひらを離しました。180センチある僕よりも、さらに高い187センチのトオルの長い腕が、黒い空に大きく伸びました。

「どうしたの？明日早いんだよね。用意とかしないの？」

僕はもう一度尋ねました。もう0時を回っています。朝早めの列車で帰ると、さっきの話で聞いていましたから、早めに帰って寝ないとキツイだろうと思ったのです。

トオルは、まだ体に酸素が行き届いていないかのように、どこかボオっとしながら白い息を吐いています。

「・・・なんだろな？・・・もつたいなくてさ。」

やっとトオルが声を発しました。

「もつたいない？・・・なんのこと？」

僕は、トオルも同じ気持ちでいてくれていたんだ、とその言葉を聞いて感じました。それなのに、どこか気づいていないかのような言葉返してしまっ僕でした。

僕、ずるいな。なんとなくわかってる、そして僕も同じこと感じてる。それはうれしいことなのに、相手からの言葉だけを待ってる。

トオルが口を開いて答えようと思いました。

「……つかさ……。」

「……僕も、同じだよ。……何か、今夜がこれで終わっちゃうのがもつたいないな、寂しいな、って思いながら歩いてた。

せつかく今夜『また出会えた』のに、全然話し足りない。もつと話したかった。もつと僕の事を知ってほしいし、トオルの事知りたい。……3年半一緒にいたのに、知らないことがたくさんだもん。」

トオルが何か言おうとするのを遮って、僕は言いました。今まで、僕は相手からの言葉ばかり待ってきたような気がします。自分の気持ちをつたえる事をおろそかにしてきたのかもしれない。でも、今夜は自分から伝えたいと思ったのです。

トオルは、少しポカンとした顔つきでしたが、すぐにいつもの笑顔を見せて言いました。

「……わかってんじゃん。……。」

そして、そつと僕の頬に、その手のひらで優しく触れました。

トオルの肉厚な手のひらは、野球部時代の名残りなのでしょう。少し硬い皮膚で覆われていてゴツゴツしたものでした。

それでもその感触も温もりも、僕にとっては、今までで一番あたたかく感じられました。



## 幸せの輪郭 - 1

いつも通りの月曜日でした。週はじめの全体朝礼を終えると、あわただしく各部署が仕事に取り掛かり始めました。

僕は必要な部品を揃え、製品番号台帳のようなものにそのロット番号などを記入し、自分の席に着くと、顕微鏡を覗きながら、いつものように「ユニット」と呼ばれる光精密部品の製作を始めました。

細かい部品を、顕微鏡で見ながら針のように細い器具を使って接着していく仕事です。慣れたとはいえ、やはり製作には非常に集中力が必要でした。ほんの少しの気の緩みや、ほんの少しの振動で、作り直しになってしまうのです。

「ふう……。」

なんとか接着が終わると、思わず大きく息を吐き出してしまいます。ちよつとしたいつもの緊張が解かれ、僕は空席になっている左隣のトオルの席を見つめました。

いつもならそこにあるはずの、大きな体を窮屈そうにかがめて顕微鏡を覗いているトオルの姿がないことに、僕はなんともいえない寂しさを感じていました。

その後、結局僕とトオルは、僕のアパートで一夜を明かしました。

あまりにも展開が早いのかも知れません。それでも僕は、そう感じませんでしたし、おそらくトオルもそう感じてはいないと思います。

僕の経験といえ、その日会ったばかりの人ばかりで、ほとんどがその日限りでした。まれにその後数回会った人もいましたが、長続きするような付き合いではありませんでした。

展開からいえば、トオルとのその夜も、今までの流れと何ら変わらないのかもしれませんが、「今までも会っていた」相手であって、「これから会う」相手であるということでした。

付き合っにして、付き合わないにして、職場仲間だけに、イヤでもこの先、顔を合わさずにはいられないわけです。

そういう相手とセックスをしたことが初めてだった僕は、正直、この先の展開が読めずにいました。

明日、目覚めたら、どんな顔して話せばいいんだろう・・・

今までと同じように、職場でやっていけるのかなあ・・・

一つの布団の中で、規則正しい寝息を立てながらこっちを向いて眠っているトオルの寝顔を見ながら、眠れずに、僕は薄闇の中でぼんやりとそんな事を考えていました。

トオルの体のぬくもりは、今まで感じたものとはどこか違う安らぎを僕に与えていました。それは、トオルの「中身」を僕が知っているからなのでしょう。

今までの相手は、ろくに性格も知らないうちにセックスをしてみました。僕は相手が眠った後も眠れずにいることが多く、その時にいつも決まって「冷えたもの」を感じていたのです。それは、自分の心の中にも、相手への気持ちにも。

実際、その相手も「中身」を知れば、とてもいい人だった可能性も

あるのです。

ただ、「中身」を知る前にセックスをしてしまう、そんな性欲に流される自分への罪悪感や、どこかうしろめたい気持ちが、そんな冷めた気持ちになってしまったのかもしれない。

トオルの広く大きい体に包まれているのは、とても心地いいものでした。トオルの性格のように、僕を包み込んでくれるような包容力は、僕をとっても幸せな気持ちにしてくれました。

僕はまた、トオルの寝顔を見つめました。口を半開きにして、かすかなイビキを立てながら寝ているあどけない寝顔が、とても愛しく可愛く思えて、僕はそっとその唇に僕の唇を合わせました。

「……んんあー……」

言葉にならない寝言を言って、トオルは寝返りを打ちました。僕の前にはトオルの広い背中が向けられました。今までの相手に背中を向けて眠られたときは、どうしようもない虚しさを感じたものですが、不思議とトオルの背中にはそういうものを感じませんでした。

僕はトオルの背中に寄り添って、そのぬくもりと、規則性をもって打つ心音を感じていました。

今までの人にも、こうやって寄り添ってみたらよかったのかな？

そんな事を考えているうちに、僕もいつの間にか眠りに落ちていました。

「……ル、ハル……」

体を揺する振動と、トオルの声で僕は目を覚ましました。

「……んああ……おはよう……」

僕はまだ完全に目を覚ませずに、薄眼を開けて答えました。

トオルは寝ころんだまま、肩肘をついて僕の方に体を向けていました。ふと気付くと、トオルはなんともなしに、僕の顔、首、肩、胸を優しく撫で続けていました。

僕を見つめる瞳は、優しく、あたたかく、それでもいつものようにどこかイタズラめいた、よく知っているトオルのまなざしでした。

「……なあ、ハル……?」

僕の体を撫でながら、どこことなく真面目な口調でトオルは僕に言いました。

「……何……?」

僕は何となく身構えて尋ねました。

それがトオルの指先にも伝わったのか、少し意地悪そうに微笑んだあと、満面の笑みを顔中にたたえてトオルは言いました。

「……俺達……やっちゃったなあ!!……まさかこんな朝になるなんて……」

「……ていうか、もう一回やるっか？」

おちゃらけ気味には言ったものの、トオルは、僕の上に覆いかぶさってきました。

「……バカじゃん……」と僕は呟いていましたが、その唇を、トオルの唇がすばやくふさいでいました。それでも、僕はトオルに抱かれているのがとても心地よく、ただ身をゆだねていました。

二度目の眠りが覚めたのは、午後2時を回った頃でした。

「やべえ、俺、今から帰ったら夜になっちゃうよ。」

トオルは、時計を見た途端、急いで身支度を始めました。

僕は、布団の中に一人裸のまま、その姿を眺めていました。なんとなく取り残される子供のような気分になって、少し寂しさを感じていました。寝不足もあって、少しけだるい気分が僕を襲っていました。

「何ボケっとしてんだよ。ハルも早く用意しろよ。」

トオルが僕に言いました。

「……？……僕、別に出かけないよ？」

僕が不思議そうにそう言うと、トオルは大げさに溜息をついてみせたあと、言いました。

「ハル・・・おまえ、彼氏が帰省するっつーのに。駅まで見送りく  
らいしてもいいんじゃないかねえ？・・・なんちって、気が早い？」

彼氏。

その言葉に僕は異常に反応してしまい、うれしいような照れくさい  
ような、トオルが言うように、気が早いような、それでも確実に幸  
せな気持ちを感じていました。

そっけなくふるまうことも、素直に喜びを表すことも出来ず、僕は  
恥ずかしくて何も言えずにいました。

ふと見ると、トオルも心なしか赤面しているように見えました。少  
しの時間、二人の間に無音の時間が流れたような気がしました。

ふと、昨晚の事を思い出しました。

素直な気持ち、自分の気持ち、ちゃんと伝えないといけない。自分  
から伝えることはとても大事で、もしかしたらトオルは今もまた自  
分からボールを投げてくれている。いつもトオルに投げさせている。  
せめて、僕はそれを受け止めて、しっかり投げ返さなきゃいけない。  
頭の中で急いで考えました。結論は、自分の気持ちを素直に、そし  
て行動にすることのような気がしました。

「そうだね。駅まで見送るよ。」

僕はそう言って枕もとの服を着始めました。

「あ、ウソウソ。いいよ。めんどくせえだろ。冗談だよ。」  
トオルは鏡に向かって髪型を整えながら言いました。

「ううん。行くよ。・・・だって、・・・彼氏でしょ？」

鏡の中のタオルの視線が、ふと止まった後、僕を見つめていました。

「それに、しばらく会えないのなら、少しでも一緒にいたいし・・・」

僕の言葉に、鏡越しのタオルの瞳が優しく微笑みました。

そして、振り向いたタオルと僕は、今日、何回目かわからないキスを交わしました。

## 幸せの輪郭 - 2

僕は休憩室の喫煙所でタバコをふかしていました。

何となく浮かれているのでしょうか。考えることといえば、週末のトオルと過ごした時間の事でしたし、これからのことでした。

今までの休日といえば、たいていは浜松、といっても、駅周辺の繁華街やデパートをブラブラするぐらいでした。いつも時間をもてあまし気味に過ごしていたのですが、二人でなら行動範囲もぐんと広がるような気がしていました。

館山寺温泉、弁天島、佐鳴湖・・・浜松周辺にはたくさん観光名所があります。僕はトオルと二人でいるんな場所に行ってみたくて考えを巡らせていました。今までは、そういった場所に行きたいと思ったことなどなかったのに、トオルと二人でなら行きたいと思うのです。こういった気持ちの変化はどこからくるのでしょうか。人につきあった経験のない僕には、よくわかりませんでした。

昨日の今日で、気分が高揚しているのが自分でもわかっていました。

その裏で、浮かれすぎないように自制している自分もいました。両親の事故の事を思い出していたのです。

まるでナイアガラの滝のように、浮かれ気分から一気に突き落とされたあの時の気持ちをまだ覚えています。そして、浮かれすぎていた夜やそれまでに対して後悔したことも。

自分を見失うことだけはないように、周りが見えなくなることがないように、僕はそれだけは肝に銘じておこうと思っていました。

それでもトオルのことを考えると心は躍っていました。

早く帰ってこないかな。

夕飯とか作ってあげようかな。

いっそ、ふたりで住むっていう手もあるよね。

ふと我に返ると、あまりにも先の事を考えたりしている僕がいました。

どうあがいても、しばらくは浮かねずにはいられないようでした。

「おい、テレビに内田みたいなのがでてるぞ。」

そんな声に、僕は休憩室に備え付けられている小さなテレビに目を向けました。

昼間のバラエティー番組でした。多くのお笑いタレントが騒いでいました。

その中に一人、いわゆる「オネエタレント」がいました。

僕に似ていると揶揄されているのはほぼ間違いなくこのタレントのことでした。

「ええ？だれですか？」

僕は知らぬ振りをしてその声の主に尋ねました。それは、僕の所属している部の山本という上司でした。この上司が声をかけてきた時点で、今までの幸せな気持ちが一瞬で萎えていくのがわかりました。そして、このあとの話題の展開もなんとなく読めて、僕は少し面倒くさいなと思っていました。

「こいつだよ、BABAちゃんっていうの？なよつとしててさ。内田みたいって、前も言ったじゃん。」

周りから笑い声が起きました。

「やめてくださいよ。やだなあ……。」

僕はそう言って、またタバコに火を点けました。

案の定、そういう話題でした。

時々「オカマネタ」の話を持ち出しては、僕に話題を振るので、正直僕はこの山本という上司が好きではありませんでした。

からかわれてもそれなりにかわすことが出来るようにはなっていますが、それでも多くの人がいる場所で自分を笑いのタネにされることは、あまり気分のいいものではありませんでした。

喫煙所を出てしまえば、不愉快な話題から逃れることは出来るのです。ただ、そうすることで僕は何か「負けてしまう」ような気がして、僕はいつもせめてタバコ一本分くらいの時間をおいてから、その場を離れるようになっていました。たいていそんな話題は長く続かず、すぐに違う話題になっていました。

「……しかし、なんでこういう風になっちゃうのかね。テレビで見てる分には笑えるけど、身近にこんなのなら気持ちわるいよなあ？……何か、浜松にも何件かそういうのが集まるスナックとかあるらしいぜ。……内田、おまえ、行ってないだらうなあ？」

その言葉にまた笑い声が起きました。

まさに二日前に行ったばかりだったので、何となく見透かされているような気がしてしまい、少し心臓の鼓動が速くなっているのを感じましたが、僕は何でもないように答えました。

「行くわけないじゃないですか。僕、東京に彼女いるんすよ。」

「そんな細い体で腰振れんのかあ？腰折れちまいそうだなあ。」

僕の言葉に山本さんがすぐさま返しをいれて、周りの人々は笑い続けていました。

山本さんも心底意地悪で言っているのではないのはわかっていても、その言葉の裏には「こいつはオカマっぽい」という気持ちがあるのがわかります。

僕は、「オカマ」や「ゲイ」は、「自分を落として笑いをとる名人」だと思っています。少なくともこの上司のように、「他人を落として笑いをとる」よりは、気持ちよく、他人を傷つけない方法を知っているのではないかと感じていました。

僕はなんで「オカマ」や「ゲイ」というだけで、笑いの対象にされなきゃいけないのだろうと、テレビの中でおどけてみせる「BAB Aちゃん」を眺めながら考えていました。

からかわれるのにも慣れたとはいえ、それがいつまでも続くと不愉快になってきます。

なぜか今日は一向に話題が変わりませんでした。「BAB Aちゃん」はまだテレビの中で「必要以上に」はしゃいでいましたし、山本さんはそれを見て笑いながら、いつまでも浜松のゲイスナックの存在やら、ゲイについての話を続けていました。

だんだん僕は喫煙所にいるのが苦痛になってきました。短くなったタバコを灰皿に押し付け、さっさとこの場を離れようと、僕はドアへと向かいました。

山本さんやその周りの人々は飽きもせず、同じ話題を続けていました。

後ろ手にドアをしめかけたその時、何気ない会話が聞こえました。

「トオルがいたら話に乗ってくんだけどなあ。」

その言葉を聞いた瞬間、僕の中で何かわかったような気がしました。それは、いまトオルがいないからこそわかった、大きな大きな気持ちでした。

僕は喫煙所を出て、工場棟の脇にある中庭へと歩いていました。

さっきまでの不愉快な気持ちはすでに消えていました。

そんなものより、もっと大きな気持ちに気付いて、少し僕は呆然としていました。

ああ・・・そうだったのかあ・・・。

北風が吹く中庭を歩きながら、僕は空を見上げながら考えていました。

僕もこの職場に来てから3年半経っていました。自分なりに頑張っ  
てなんとか続けてきたつもりでした。

それでも、さっきのような不愉快な出来事が繰り返されていたとし  
たら、すぐに辞めていたかもしれせん。

考えてみれば、ああいう話題になった時、僕の近くに必ずトオルが  
いたような気がします。ネクストの事務所ではじめて会った時、僕

がゲイだと見抜いていたトオルです。

山本さんとも職場では仲良くしているトオルです。僕のいないところで、「内田はオカマっぽい」と話を振られていた可能性は大きいのです。

頻繁ではないにしろ、時々「ゲイ」絡みの話題になった時、いつもトオルは真っ先に話に乗っていました。

「なんすかー。山本さん、掘られたいんじゃないんすかー！」

そんな言葉を冗談まじりに言いながら、誰かの背後に回って腰を振るようなしぐさをしては、周りの笑いを誘っていたトオルの姿が思い出されました。

あれは、乗っているふりをしながら、実は矛先を自分に向けて、僕に話題を振られないようにしてくれていたのではないのでしょうか。その話題になれば、僕がからかいの対象になることをわかっていて、僕が傷つかないように、落ち込まないように、気遣ってくれていたのではないのでしょうか。

いつもトオルはひとしきり笑いを取った後、さりげなく当たり障りのない話題に話を持って行っていました。

僕は話題が変わるとほっとしていました。トオルはたぶんそんな僕の気持ちをすべてわかっていたのです。

慣れたつもりでいました。そう見えなくなっていたように感じていました。

それでも、さっきのような出来事があれば簡単に落ち込んだり悲しくなってしまうような、あまりにも脆い僕の心だったのです。

それもおそらくトオルは見抜いていたのでしよう。同期で入社して以来、ずっとさりげなく僕の事を心配してくれていたに違いありません。

僕は、トオルにずっと、守られていたのです。

トオルの大きな愛を実感しながら、大きな青空を見上げていました。僕はなぜ気付かなかったのでしょうか。ずっと、ずっと前から、トオルは僕の事を愛してくれていたのです。

雲ひとつない青空でした。この空は、いまトオルがいる新潟にも確実につながっていて、同じ空の下にいるトオルに届くようにと、僕は目を閉じて思いました。

トオル、ありがとう。

いないからこそ気づくこともあるんだね……。

早く会いたいよ……。

一人で少し照れながら、中庭の芝生に寝転ぶと、初冬とはいえ、草の青い匂いがぷーんと鼻をつきました。

頬にあたる草がくすぐったくて、僕はトオルとの時間を思い出しながら微笑んでいました。

### 幸せの輪郭 - 3

それから4日後、予定を少し遅れて、トオルは帰ってきました。

「・・・なんかお前いいことあった？・・・微妙に優しいんですけど。・・・こええ。」

到着の時刻に合わせて駅まで迎えに行った僕に、トオルはおどけた感じでそう言いました。

この、トオルがいなかった3、4日の間で、僕の中のトオルへの思いは確実に変わっていました。そんな気持ちが無知無識のうちに僕の態度には表れていたのかもしれない。

「・・・そうかな？いつも優しいんですけど。」

相変わらず素直になるのが苦手な僕は、そんな言葉をトオルに返しました。それでも、荷物を抱えて億劫そうに改札口に立っているトオルを見ているだけで、なぜかうれしくて笑顔になっている自分がわかるのです。

「おじいさんの体調はどうだった？」

「・・・まあ年だから、すぐぶる元気って事はないけど、別にたいしたことなかったよ。」

心配してくれてありがとな。」

そんな会話を交わしながら、僕たちは駅舎の外へと歩きました。

初冬の午後6時ともなると、外はもう闇に包まれていました。ただでさえひらけていないこの町の駅前には街灯も少なく、わずかに点在する飲食店のネオンがさみしそうにポツン、ポツンと光を放っていました。

「荷物、重いでしょ。このカゴの中に入れなよ。」  
僕は、自転車のカゴを指差してトオルに言いました。仕事が終わったあとそのまま駅に迎えに来ていました。

「サンキュ。・・・てかハル、お前マジでなんか今日優しい！なんですか？」

トオルは僕の顔を覗き込んで尋ねました。

「・・・こんな事で優しいって言われても・・・いつもそんなに冷たいかなあ。」

僕の顔を覗き込んだトオルの瞳はいつものようにいたずらっぽく、それでも僕の心は見透かされているような気がして、なんとなく僕ははぐらかしてしまおうのでした。

「・・・素直に言えよなあ。・・・久々に会えてうれしい！ってさ。ハハ。」

そんな僕を横目に、トオルは僕の本心の真ん中を突いた言葉を冗談交じりに言いながら笑いました。僕は苦笑いをしながらも、軽くトオルの腕をつかんでいました。

しばらくたわいもない話をしながら歩くと、県道に出ました。僕の部屋とトオルの部屋との分かれ道でした。

僕は、僕の部屋への道に向かう信号が青なのにもかかわらず、交差点を渡れずにいました。

僕たちは交差点の角に立ったまま、とぎれとぎれの会話をしていました。

お互いが同じことを考えて、同じことを言い出せずにいるような気がしていました。

「あ、そういえば・・・ハル、これ土産な。なんか新潟の有名な酒なんだってさ。」

ふとそう言っただけは紙に包まれた瓶らしきものを僕に手渡ししました。

「あ、ありがとう。わざわざよかったのに。ごめんね。」

「・・・俺、荷物置いてきてから行くから。一緒に飲もうぜ。明日明後日どうせ休みだし、いいよな？」

僕の言葉に間髪いれずにトオルは言いました。

僕も迷っていたのです。この4日間、ずっとトオルのことばかり考えていたのです。会いたくて話したくてしょうがなかったのです。

そんな気持ちで駅から15分間、この県道までのひとときでおさまる訳はありませんでした。それどころか、側にいたい気持ちは募る一方だったのです。

長旅の疲れもあるであろうトオルに、そんな気持ちを伝えることが出来ずにいたのです。

「ハル、お前、めっちゃわかりやすい・・・。うれしそうだなあ。」

僕は喜びを隠しきれずにいたのでしよう。トオルを見つめていた自分の顔が紅潮するのが、自分でもわかるほどでした。トオルはただやさしい笑顔で僕を見つめていました。

「・・・バカ。・・・でも、いいけど大丈夫？疲れてない？」

「疲れてなくはないけどさ。・・・ハルと話したいし、さ。」

「・・・。うん。じゃあいろいろ用意して待つてる。あとで連絡して。」

「おう。あとでな。」

ひとまずトオルと別れた僕は、自転車を押しながら県道沿いを歩き始めました。

なんとなく「幸せ」というものの「輪郭」が見えてきたような気がしていました。

「幸せ」「イコール」「恋」や「愛」だけではないということにはわかっています。それでも、いま僕が感じている喜びは、今までに感じたことのないものでした。

「金」じゃもちろん得られない、「友情」は近いけどどこか物足りない、言葉にするのは照れ臭いけれど、「愛情」を実感するのがこんなに幸せなことだとは知りませんでした。

DUBでの「二度目の出会い」からまだ間もないのですが、トオルとならこの先続いていくような予感がしていました。

いままで出会った相手で、漠然とでも「未来」を想像した相手はいませんでした。経験の浅い僕にはわからない事ばかりですが、「二人での未来」を想像出来るか出来ないかというのは、もしかして大きいのもかもしれないと感じました。

ゲイである以上、「結婚」出来るわけではないけれど、1年後、2年後、3年後、近い未来でも「一緒にいたい」と思えるのはトオルが初めてでした。

トオルの場合は、職場での同僚で以前から性格を知り、知られていたのも大きいのかもしれません。

そんなことを考えていると、不意にPHSのベルが鳴りました。

「……もしもし、あ、トオル。どうしたの。  
……え、もう向かってるの。早すぎない？……何、言っ  
てんの。バカ。  
……うん。まだ着いてないけど。  
……早くおいでよ。……うん、待ってるね。あとでね。」

PHSを切って、僕は自転車のペダルをこぎ始めました。  
夜の闇にまぎれてわからないけれど、いまの僕の顔は端から見たら  
気持ち悪いくらい笑っているに違いありません。  
自転車のカゴの中で、トオルにもらったお土産がカタカタとリズム  
カルな音をたてていました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0428g/>

---

かげろうの向こうに

2010年10月9日13時16分発行